

ふが戦ひでありませふ。いかにも其の通りでござる。然れば御法義もその通でありて。平日の聴聞は演習なり。平日聞たことを實地に行ふことである。平日聴聞するがたゞ演習ばかりになりて。死すること。未來のことが。遠き餘所のこととなりて。實地吾身に引受けて聞いてない。まさかの時狼狽する。平日の聴聞の通りを實地に引受け。佛智不思議の妙願力を信ずるはかりなりと。話をしたことである。今もその通り平日聞たことを實地に行ひさへすればよいのである。平日の慈善會は演習である。かゝる事があれば。かゝる金を以て給恤するとか。又戦争の起つた時は。恤兵の爲に幾許の金を獻上するとか。其心得を聴聞し演習して居たが。彌よ事の起つた時實地にこれを行ふたけのことである。何事もその通りで。平日の事とまさかの時とか違ふてはならぬ。世間に所謂烟水練と云ふが。水

練するには。日々水中に入て泳ぎ習ひ。終には八丁でも十丁でも。水中を行くこと地上を行くが如くに自由を得るが。水練の効なり。然るに水に入らずして。畑けの中で水に入て泳ぐときはかやうくとどれば道徳を練磨しても。まさか水に入た時は。更に用いたゞぬ。今も平日聴聞したことが。たゞ畑水練では残念なことである。平日の聴聞がたゞ道徳を屈ばかりになりてあると。實地の時更に其用きをなさぬ。平日其心得さへよければ。事に臨んだ時平日の仕業が直に用に立つのぢや。太田道灌の歌に「かゝるときまさこそ命のをしからめかねてなき身とおもひしらすば」平日かねて心得置き實地に當て。最早命はなきものと。承知して居れば。事に臨んで死をもて戦ふとも。更に命はをしいと思ふことはない。平日その心得がないとまさかのときしにともないとうろたへる。慈善の事業も其如く

能く平日に心得たことがまさかの時に用に立のである。さて正く慈善の事を御話致しますか。慈善がたゞ演習になりてはいかぬ。又内地でいへば。或は震災にかゝりた國へ。米を施すとか。又は洪水に逢た處へ着類を施すとか。これが皆實地に慈善を行ふと云ふもの。小さき事をいへば。窮民に米を施し。流行病のある時施薬する等。皆是慈善を實地に行ふのである。處がこの度は支那と開戦の詔りを御發布に相成り。已に各々承知の通り。第三第四の戦となり。陸海軍數萬の軍勢を御繰出に相成り。大元帥陛下には。已に本營を廣島に進めさせられたり。これはと迫りて居る場合に臨んで。虚路裡寛としては居られぬことであります。それで慈善會の會員といはれませふか。同胞四千萬の臣民。一人としてこの大事を餘所に見ることはならぬ。殊に佛の平等の慈悲を受けて。佛教慈善會の會員とあ

れば。いよく大慈悲を起し。實地の慈善を行ふべきことである。それから已上に付ては。寒さ暑さに付て。其機く々に應じて事業をなさねばならぬ。處が慈善は慈善なれども私の身よりの者は。戦争に行て居らぬによりて。一通りのことさへしておけば。その上はするに及ばぬと云ふものがある。そこを思ひやるが慈善會の演習である。我身にかゝりて居るからする。身にかゝらぬからせぬと云ふは。平等の慈悲と云ふものでない。又この慈善會からは。先達て手拭が送りてある。金が上げてあると云人もあるが。手拭ばかりが慈善でなく。金ばかりが慈善でない。若金ばかりを云ならば。この會に出てくるにも。婦人達の一度出會するには。髪を結ふとか。着物を着替へるとか車に乗るとか。十錢。十五錢の金は忽ち費はる。すれば茲に出て来るより内に居てその代りに五錢の會金を出して置け

はよいと云ふやうなものである。金ばかりでない。慈善の心を養ふのである。戦争の初つたときは至て暑さ甚しき時でありたが。此頃になれば。追々寒さに向ひ。殊に朝鮮などは急に寒なる様子。嗚々困難であらう。彈丸雨飛の中にて打死の人もあることなるが。實に傷まじきことなりと。思ひやりて慈善心を起さねばならぬいやく待て下され。死ぬることは後と廻し。負けることは云はぬやうにとと云はるゝであらうが。負けてはならぬ。是非勝たねばならぬが勝てば勝つほど。彌よ大事である。此度のこととはたゞ支那に對すると云ばかりでない。朝鮮の獨立に付て義戦をなさるのであるから。伏するまではどこくまでもゆかねばならぬ。萬國に對しての義戦ぢやによりて。中々容易に濟むことでない。東本願寺の御堂を建るにも。新初をしてより何年になるぞ。大なる本堂を成就するまでに

は容易なることではない。況や萬國に對して義戦するには。容易からざることなるゆゑに。それを思ひやり慈善心を起して。事業を運はせねばならぬ水戸中納言齊昭卿。未だ外國と交通せぬさき。下々の者は日本の外に更に國なきものゝやうに思ふて居る時。御身は三十五萬石の御大名の御隠居様。更に不自由なき御身が。平日の心得を壁書になされて置れたことがある。其文に曰く。一飯をうることに兵糧の粗しきを思ひ。一つ衣を製して甲冑の窮屈なるを思ひ。一つ居室を構ゆるに陣中の不自由を思ひ。一つ起居の安きに山野の苦しみを思ひ。一つ父母妻子同居と親族と交はるに遠國離居の時の悲歎を思ひやりて今日の無事安穩を大幸とせば何を奢の念を生せん」この壁書を長州藩の吉田松蔭と云ふ先生が活刷して松下村塾に於て塾生に頒たれたことがある。この人も國の爲を思ひ。國事の爲に安

政の午年三十一歳にて。所刑にかゝりて死なれたり。この吉田松蔭と云人の手よりこの壁書を得たことであるが。かくの如く身に不由なき。御大名が。何も事の起らぬ先きに。泰平の世の中に兼て用意をなす。心得を示して置れました。然れば平日に豫てその心を用ゐて。實地の用意をして置ねばならぬ。何事にも心がなき時は致し方がない。或人が金満家の檀那に對ふて。何卒一度貴殿の方へ被招たいが。どうぞよんで下されといへば。よび度けれども。一つないものがあるから。よぶ事が出来ぬと云ふ。そこで貴殿の方にないものとは。云何が御座る。金はある。家は立派なり。諸道具は揃ひ切てあり。何がないので御座ると云へば。されば金も家も道具も揃ふてあれども。たゞ一つおまへを招ぶ機がないと云れたとある。今慈善の事業も。金が有ても人が多く有ても。其心がなきときは何事

も行ひがつかぬ。依て例月この會で寄集りて。佛教の謂れを聽聞し佛智回向の信徳により。平等の大悲を我身に得て。其慈悲心より起りたる事業であるならば。眞實の慈善が出来ます。これが今日の肝要である。

○知恩之事 (神戸市知恩會にて)

さて知恩會を設けられたるこの知恩といふに付て。吾眞宗に於ては信心の利益として知恩報徳の益といふがありて。恩を知せていたゞくことである。其の恩には佛は四恩といふことを説たまふ中に。初の三は世間に於ての恩にて。則ち父母の恩を知て孝をいたし。國王の恩を知て忠を盡し。一切衆生の恩を知て。同胞相憐むの情を以て國家に義務を盡す。即ち此度この知恩會なるものを組織し。毎日一厘つゞを勤儉より運び出して。恤兵費等に獻納するといふの志し。

これがすなはち知恩報徳の行爲である。これを日に一厘つゞ出すのは面倒たに依て。三十六錢一度に出して置たならば。一年中参らずとも濟む私は已に恤兵金獻納致したに依て。最早その事は濟んだのといふわけにはゆかぬ。たとへば日に三度つゞ食するは面倒たから一度澤山に食て置て。一日食はぬといふ譯けにはゆかぬ。湯にも毎々入るは。甚た面倒たに依て。一度に半日も這入て置て。一月も這入らぬと云ことにも出来ぬ。食事も面倒でもやはり三度づゝいたさねばならず。湯にもよく身仕舞する人は。毎日に入るやうにするなり。學校に入て學問するも。毎日に習ひ覺てゆくから。終に卒業するに至る。三十日も休んで居て。その代りに一日か二日に。晝夜勉強するといふやうなことにゆかぬ。毎日することが面倒になりたら。最早その時が道の棄たりであるのである。今も毎日に知恩の

行爲が面倒なといふ人は。いまた恩を知たとはいはれぬ。この恩を知らぬひとは眞宗の信徒といはれぬのみならず。實は人間といはれぬことである。依て龍樹菩薩は。恩を知らざる是を畜生と名くと御示しなされた。然ればこの知恩報徳のことは。毎日に忘れぬやう。面倒がらぬやうにせねばならぬ。この勤儉のことは。眞宗内のことのみにあらず。廣く四千萬の臣民がせねばならぬことである。各人之勤勉は國家富強之基也各人之懶惰は國家窮乏之基也といふ語がある。一人くが勤儉すれば。それが國家の富なり。一人くの不勉強不節儉は。即國家の貧乏の基である。論より證據でも。予は先頃まで九年間本山の護持會に従事してありしが。已に護持會の金高は一百三十餘萬圓の金額。御本山に有ては第一の軍事公債御發布には。五十萬圓の應募御出願に相成り。又第二の御發布にも又速に五拾萬

圓の應募御願ひ出に相成たり。護持會の金をこの方へも御立用に相成てありて。忽ち報國の用をなす。末寺門徒の上より勤儉の功を積で御取持をなせば。末寺門徒の方にはそれほど。目に見えて。貧乏したと云ことはないが。御本山に於ては。百三拾餘萬の大金となり大なる効蹟を顯はすに至る。今四千萬の同胞兄弟が。一日に儉約で一厘と。勉強で一厘と。日に二厘つづを出さば。一月に貳百四拾萬圓の大金となる。然れば壹億五千萬圓の軍事費も。僅數年の間たに償ふに至るなり。實に君恩國恩の程を了知したならば。各々心を一にしてこの勤儉の二つをもて報恩の行爲をなさねばならぬことである。今一層進んで。佛恩を知て報謝を勤むるに付て。云何かすれば報恩になるぞといふに付て御話を致ませう。今佛法を信ず。佛恩を知りたるものは。いよく君の恩。父母の恩を報せねばならぬことである。

ある。併しこれを予が話すと。たゞ時勢に泥んでいふやうに思はるによりて。先徳の言に依て話をいたせば。先徳の御言に。生々にうけし六道の生よりは。このたびの生はもつともよろこばしく。世々にかうふりし國王の恩よりは。このところの皇恩は。ことに重しと御示あらせられた。今この受けた人身。この佛法を信ずる身を受けたることが。まことに喜ばしきことである。惡う心得ると仕合の惡きものは。我身の心から身を持ちあぐみ。つひにはこんな體たを親が生んでくれたから杯と。親に不足をいふものがある。立身出世して身の仕合を思ふときは。父母よりこの身體を貰ひ受けた。その御恩の廣大なることを喜んで。仕合がよくなればなるほどいよく親の御恩が尊くなる「たらちねの母のよろこぶ顔をみれば父もまさばと思ひけるかな」これは或る薩州出身の歴々の人の歌である

御一新前後より王事に力を盡し。種々勲功重り。終に華族に列せられ。其母親の喜ばるゝ顔を見につけて。この幸福を受くるこの身を賞ふた。廣大な御恩の父母。母親がかくのことく喜ばるゝ顔を見るにつけて。あゝ父もましますならば喜びたまふであらふにと父を慕ふころである。他力本願の御由を聴聞し。未來は無上涅槃の大果報を得たてまつる身となり得たものは。この身を受け得た父母の恩の廣大なることを喜ばねばならぬ。中祖大師は「父母の御恩を深く思ふべし彌陀たのむ身をそたてたまへば」と示したまひた。普通一般の人よりは佛法を信する身の上は。わきて此身を育てたまふ父母の恩を喜ばねばならぬ。華族に列せられたところでない。この世には正定聚不退。未來は無上涅槃といふ廣大な幸福をうるのである。これを生々にうけし六道の生よりはこのたびの生はもつともよろこ

ばしと。御示しなされたのである又世々にかうふりし國王の恩よりは。このところの皇恩はことに重しとは。佛教を信する身の上には。この皇國に生を受けたことを深く喜ばねばならぬ。何せなれば。この佛教の連綿と相續して。何の時に。何なる處にても。聴聞させて頂くは。全く天皇陛下の皇恩である。これに就て大に感覺を起したことがある先達て即十一月三日天長節の日。友人に誘れて。大和の國立田法隆寺へ參詣を致しました。特別に寶物等の爲拜を致し呉られ。島地氏と予に請ふて。幸の事故一泊して。今晚演説を願度いとのことにて。法隆寺に一泊致しました。依て種々の寶物を拜觀する中に。これは百濟國の曇澄の書等と幾等も百濟國の高徳の人等の書畫彫刻等あり。これに付て大に感覺の生じ。この皇國すなはち我々の生れた御國の。尊く難有ことを感喜致しました。云何

といふに。百濟國といふは今の朝鮮のことである。その朝鮮が我國へ佛法を渡した國にして。昔は佛教の盛な國でありた。又其本へ派れば支那なり。今一つ派れば印度である。佛教のみならず仁義忠孝を教ふる儒教も。支那より出で、朝鮮日本へ傳はる。してみれば支那は本家なり。日本は末家といふべきものである。然るに其本家より却て末家が盛んになり。益す其眞理を發揚するに至るものは。何ゆへぞといへば。是全く國徳にして。偏へに皇恩の然ら令むるところである。いかんといふに。先支那の國でいへば禪讓放伐とて。其國を治る國王が。或は國を讓り。或は伐ち取り。度々國王が替るゆへに。其替る度に教法も亦從て替る。唐の太宗の如き佛法を尊信せらる。國王の代には。佛教は甚た盛んにありても。國王が替れば。佛教も亦衰退するに至る。朝鮮の如きも昔の國王は。深く佛法を信

仰せられしゆへ。其國に佛教が盛んにありたゆへ。學者高德の人等も澤山ありた。今の朝鮮の國王の代となりてより。今年で五百三年になる由なり。國王の替る毎に教法も亦盛衰を異にす。我日本の如きは。皇統一系にして。奈良の大佛御建立遊はされ天子さまも。今の平安城即京都に都を移したまひし。桓武天皇も。皆今上皇帝陛下の御先祖にして。同く佛法を尊信し護持遊はされ。殊に憲法に於て信教自由の權を許したまひ。國家の秩序を妨げざる限りは信教の自由を許したまへば。愈よ佛教の眞正なるところを聽聞し。來世得脱の幸福を得たてまつること。これ偏へに皇恩の辱きによる。よりにて世々に受けし國王の恩よりは。このところの皇恩ことに重しと御示あらせられた

○知恩之事 (後席)

前席に於て。知恩教會の組織に付て。縷々御話し申したることなるが。其知恩といふことに付て。心地觀經には。四恩を御説なされてありて。一に父母の恩。二に國王の恩。三に一切衆生の恩。四に三寶の恩なり。その中初の三は世間の恩にして。後の一つは出世間。すなはち佛法の恩である。其初の三の中に於て。又分けていへば。父母の恩を知りたが孝なり。國王の恩を知りたが忠にして。この忠孝の二つは。人道の主要なるものにして。御勅語にも。我臣民克く忠に克く孝に。億兆心を一つにして厥の美を濟すと仰せらるゝものゝことである。一切衆生の恩を知るとは。即ち日本全國四千萬の同胞兄弟。互に相憐むの慈愛心にして。國に盡すの愛國心である。支那が軍に敗けることに上手た。逃げることに巧者などいふは。其軍さ毎に敗けるには原因がある。人と人と比べて見れば。支那人が皆

弱いといふでもなく。武器を調べて見れば。強ち皆な役に立たぬといふことではない。然るに軍毎に敗北するは。互に相憐む愛國心がなき故である。士官は兵卒を構まはず。兵卒は士官を省りみず。我身さへ善けりやよいといふ心故に。軍となれば命が惜いで皆逃けて仕舞ふやうになるのた。これ教がありても。眞實に行届てなきゆへである。日本の如きは預ねてよく教が行届き。一切衆生の恩を知て互に相憐むの愛國心が強き故に。心を一つにして國の爲に身命を顧みず。たゞかふ人ばかりであるゆへに。連戦連捷の大效を成すのである。然るに一切衆生の恩を知てみれば。日本四千萬の人民のみならず。支那の人民も。又廣くいへば。あらゆる動物則いさとせいけるものはみな。平等に慈愛心をもて憐むべきことである。してみれば軍さは出来ぬ。道理なり。又國の爲を思へば背くものは軍を起し

て打平けねばならぬ。軍をすれば一切衆生の恩に背くやうになるに
 あらずやと云ふに。これは所謂その罪を憎で。其人を憎まずといふ
 はけである。たとひ我國四千萬の同胞兄弟といへども。悪事を爲す
 時はこれを罰せねばならぬ。依て懲役もあれば。死刑に處するも
 ある。然れども惡をしたものも。其人を憎まず。監獄へ入れても。
 食はせも。着せもして。剃へ教誨師をもてこれを教へ。改過遷善
 の道に趣かしむるは。これその人はすなはち同胞兄弟の皇國の人民
 なれば相隣んで。善良に趣しむにあり。今の軍も其の如く條約あり
 て和親交際する國が。其條約を違背ひ平和を破る時は。いやでも其
 罪を責。敵を平けねばならぬことである。然れども罪なきものは。
 決して打もせず。責めもせぬ。依て現在戰爭中なれども。この神戸
 にも支那人が滞在して商法を致し居るでありませう。いかほその

罪を責めて。軍さをして居ても。若敵國が先非を悔て降参すれば。
 何時にでも軍を止めて平和を結ぶやうになるのた。故に宣戰の詔勅
 の終には。速に平和を永遠に克復し。以て帝國の光榮を全くせむこ
 とを期す」と仰せられた。いつまでも軍さをせよでない。速に平和
 にかへりて外國にまで光榮を耀かすやうにせよとの詔である。依
 て負傷者を病院へ入て養生するにも。捕虜の者と雖も。皇國人民も
 同様に夫々の御手當ありて。御憐恤あそばすことである。敵國の者
 と云て決してその人を憎にあらす。平和になれば悉く同一に相憐む
 の慈愛をもて。交際することになるなり。さてこの知恩といふに付
 て。恩は誠に廣大の恩のあることなるが。各自にその恩を能く知ら
 れましたか。先 天皇陛下の君恩をいへば長くも大本營を廣嶋に進
 めさせたまひ。實に御手狭き處に御座あらせられ。御究屈をも顧み

給はず。日夜軍政に叡慮を煩はせたまふ。御進發は御奉送申しあけ
 たが。未だ御還輦はありませぬではないか。先帝孝明天皇の御製に
 外國船の浦賀に來りし時「朝な夕な民やすかれと思ふ身のこゝろに
 かゝる異國のあた」とあそばされた。只今の 天皇陛下にも廣嶋に
 あらせられて「朝な夕な民安かれと思ふ身の心にかゝる異國のあた」
 と。たゞ四千萬の臣民を安かれと思召のみに。日夜御叡慮を惱ませ
 られてあるのだ。然るに臣民として。たゞ自分／＼の勝手ばかりを
 思ひ。天皇陛下のことを餘所に望めて居ては。君の恩を知りたど
 はいはれまい。又四千萬の同胞兄弟の中に。陸軍海軍に従事して。
 死した人も三百人。負傷の人も八百人もあるといふ。「支那の方には。
 その十層倍もある由なるが。」たどひ死傷せずとも戰場に在て。追々
 と寒威は厳くなり。二尺已上も氷の張り、ある中で。軍さをして居

らるゝことなるが。御互に俄に少々寒さが増してさへ。堪へ兼ねて
 居るでないか。支那の寒氣の強さ。二尺已上も氷の張た處で軍さし
 て居るゝことは。このやうにあらうぞ。然るをたゞ。聊かのことか
 出來ぬの。大儀なのと。小語云て居るは。一切衆生の恩を知て相憐
 むといはれませうか。先日も第四師團長殿下は。小松宮殿下と共に
 廣嶋へ見舞に御出あらせらるゝにつぎ。見舞に行くに繙帶の仕やう
 も知らずしてはならぬとて。態々看護夫を喚で繙帶の仕替やうを卒
 業して。廣嶋に趣きたまひ。病院に這入て自ら病人の繙帶を仕替へ
 て遣りて。御歸りになりたることを。親子承りました。又或る士
 官の夫人は戦争が初まりてより。日々に只た極麤末な物ばかりを食
 べ。更に平日の如き食物を用ゐられぬゆへ。其由を有人が尋たれば
 去ればでござる。吾夫は出陣已來戰中に在て。日々麤々布き物を食

し戦争に力を盡し居らるゝことゆへ。せめて内に居る私は。麤末な物を食してなりとも。夫のことを思ふて留主を致すことであると申されたとある。恩を知て見れば斯くなければならぬことである。たとひ吾が夫兄親戚は從軍して居ずとも。一切衆生の恩を知同胞相憐むの心よりは。これだけの儉約が出来ぬの。これだけの勉強はならぬのと云て居らるゝことではない。然るを恩を知らぬゆへに。勉強もせず儉約もせず。剩へ悪事を爲し。物を盗み人を傷け等の行爲をなし。法廷を煩はす如き有様となるものもある。恩を知りたなら。人の物は盗まれぬ。人に傷けるやうなことは出来ぬものなり。其知るべき恩を知らぬやうにする者は。何ぞといへば。別心の内の貪欲瞋恚といふ。煩惱の爲に瞑まされて。道を忘るゝやうになるのである。貪欲に覆はれて。好きなものかとりたくなり。瞋恚の煩惱にくる

はされて。氣に入らぬことを怒るやうになる。實に恩を知るといふことは至難きことであるなり。然れば其邪魔ものを對治して恩を知るやうにするは。いかゞすればよいぞといへば。自餘宗旨でならば種々に心配苦勞もせねばならぬことであるが。吾眞宗に於ては。即信心の得益に知恩報徳の益といふがありて。吾々が手には。煩惱を斷する行を修せねども。阿彌陀如來因位の時。不生欲覺瞋覺害覺不起欲想瞋想害想と。欲をも起さず。腹をもたえず。永劫修行と調へたまふ。功德のありたけそのまゝを。たのむ一念に衆生に與へたまふが故に。それが顯れて知恩報徳の益となりて。阿彌陀如來の御恩を知て。御報謝するばかりでなく。君の御恩を知ては忠義を盡し父母の恩を知ては孝養を致し。克く忠に克く孝にと仰せらるゝ御意に契ひ。一切衆生の恩を知ては。互に相憐むの慈愛心となりて。報

國の誠意を抽んづるやうになるのである。此座に參集の諸君は軍にも出でず。吾兄弟や夫も軍をせず。連戦連捷。帝國萬歳と大な顔して居らるゝは。出陣從軍の人々の手柄が即我が手柄となりて。居乍らにして大な顔が出来るので。今も我々は願行を爲さずして彌陀因位の願行を。信する一念に頂戴して。衆生の方には造作せず。知恩報徳の用をなすが。眞宗別途の大益である。

○戦争と慈善の關係 (京都佛教婦人慈善會に於て)

兎角人氣は。時々的事狀に移るものにして。春になりて花の盛になれば。花の事に心がより。我れも人も。花の事を思ふ。秋になりて紅葉の時節は。何所に集りても。紅葉の話。此頃は何れの處に集りても。戦争の話。三人五人集れば征清の模様を話し。いかなる人も。日々夜々に。此戦争の事に心を寄せて居る時節である。こ

の事は思はねばならぬ事柄である。何せなれば。實に開關已來未曾有の事變。國家盛衰に關する一大事。畏くも 天皇陛下は。深く御勸慮を惱まさせられ。御親征遊ばさるゝほどの御事。數多の陸海軍の軍人達。身命を抛ち出征せられてあることなれば。四千萬の同胞兄弟誰一人として。身にかゝらぬぬといふことなく。心に思はぬといふ人はない。若これを何とも思はぬといふ者ならば。日本の臣民皇國の民といはれぬ人である。然るに其戦争と慈善の關係に付て戦争と慈善は遙に別物にして。更に關係なきものゝ如く思ふなり。これ全く別物にあらず。日本出征の戦争が。連戦連捷と。戦へば勝ち攻むれば取らぬことなむといふは。この慈善といふことが根本となりてあるから。軍さに勝つやうになるのである。一往で思へば慈善は物を哀れむこと。戦争は敵軍の軍艦を撃沈めるやら。砲臺をうち

破やち。數多の人命を毀ふ。如是誠に厭ふべく嫌ふべき戦争と。一切の生靈を哀れみ恵む慈善とは。天地雲泥の違ひあり。然るにこの戦争の事。全く残忍呵酷の所爲にあらす。これが即ち慈善の所業である。何者親が子を折諫するに。子を憎いと思ふて折諫するものはない。處が子を折諫するには。子の云ふ通り。子の思ふやうにして置ては折諫にならず。そこで折諫するときは。疵つけ傷めるといふまでは至らずとも。頭の一つも打ち體を縛りて。一時や二時間は懲すこともある。頭をうち體を縛るのは。残酷やうなれども。酷いところとするでない。可愛と云ふ慈悲にあまりて。子の爲め思ふ。親の親切よりすることである。若し頭をうち體を縛るは酷いと云ふて子供のいふ通り。思ふ儘にして置くは。これは慈悲がたらぬといふものなり。これを世間では子にあまい親たといふ。子にあまいは。

慈悲ではなく。これ子に慈悲のたらぬといふものなり。其子にあまい育てやうの結果はいかゞである。親の甘茶で育た子は。終には放蕩するとか。酔狂で喧嘩したとか。博奕をしたの人を詐欺したのとか。法廷を煩し。つまり親に愧ぢを與へるやうになる。今戦争も慈悲に契ふた戦争と。慈悲に契はぬ戦争がありて。支那の戦争の如きは慈悲に叶はぬ戦争にて。慈善とは別々になりてある。そこで戦ふたびに負るのである。今日日本の軍さは。天皇陛下の慈悲心が根本となりて起りた軍さ。東洋の平和を持ち。皇威を海外に耀し。帝國の光榮を全くせんと思召す戦争にして。支那の國が頑固にして。我身勝手ばかりをするゆゑに。どこへまでもうち懲し。頑固の夢が覺めて。眞實の平和に復するまでは懲して攻戦ふが此度の軍であるから。仁義の戦争といふ。全く。天皇陛下の御仁慈より起たことゆゑ

出征の軍人達が。其天子さまの御仁愛を承けて。軍をせらるゝゆゑに戦ふ毎に捷つのである。これが所謂仁者に敵ならぬの謂にして。恐ろしき姿たの軍人。人を殺し砲臺を打毀つ。將校兵卒でも。天子さまの仁慈の思召を承て。心を一にして。慈悲心をもて戦ふ故に。至る處悉く歸服し。戦ふ毎に勝利を得るのである。先日新聞にも載せてありし如く。威海衛を攻めに行く道筋の。或る戦ひに。一人の婦人が敵軍より逃出で。幼稚の子を連れて逃ぐべきを。狼狽て子を殘して逃たり。殘されたる子は。軍の恐ろしきも辨へず。たゞ親を失ふて泣くばかりなり。夫を或將校が見付られ。さても不便や。東西不辨の此幼子。これは母を失ふて泣くに相違なし。哀れ不便やと抱き舉げば。子供も泣止む。何卒ぞ誰れかに托し。母の手許へ返しやらんと。種々に工夫を運らしても。好き方便がない。そこで其處に支那

の兵卒の捕虜が一人居るによりて。汝ち此子連れて早く逃げよ。この子を母親の手に相渡すならば。汝は命を助け逃してやると。その子を捕虜の手に渡せば。同ト支那人なれども。捕虜の手に往けば子供は頻りに泣く。そこで又取返し將校が抱て居れば泣止む。依て止を得ず。はげしき戦争中なれば。戦は止められず。子供は捨て置れず。左の手に幼子を抱き。右の手に劍を振ふて。部下を指揮せられたりと云ふ。外國の新聞記者が從軍して居て。其様子を見て。實に此度の日本の征清は。仁義の戦争なりと感トて。委く外國の新聞に載せて稱嘆せりと。又本派本山より從軍布教の爲に。唯今では七名渡清相成居れるが。其一名の人の。從者なるもの。途中にて財布を拾ひたり。早速陣中の役掛りへ届け差出したたり。取調べたる處。金四圓餘五圓足らず入てあり。遺失主は。即支那人にして。

其姓名も慥に相分りしゆゑ。其者に手渡らば相成たつ。ところが其遺失主が。其金を受取り。喜んで云には。日本の國はいかなる仁義の深い親切な國であるぞ。此支那に在ては。昔より今日まで。落したものが。二度其手に戻りたことはいりませぬ。昔堯舜の世には。墜たるを拾はずなぞといふことも有りといへども。其容なことは。兎ても人間業に出来ることにならぬ。いかなる事がありても。落した物の。二度我が手に入ことは御座りませぬ。然るに此戦争中。敵國に攻入て居るゝ中。殊に人の從者をして居る人が。拾ひ得たる物を其儘差戻し下さるとは。其厚義の程。何とも申しやうなき難有ことこれより推て見れば。日本の天皇陛下の御仁徳。萬民御撫育の厚きことが思ひ知られますと感涙にむせんで喜び日本の皇徳に歸服したとある。かゝる次第になり行て。軍の向ふ處悉く捷つ。この軍の強

いといふは即慈悲の深いこと。慈悲の深い本と爲りて戦ふゆゑ。軍が強くして戦毎に勝つのである。實に仁者に敵なるとはこのことなり。この軍人の慈悲心といふは。其本天子さまの御仁徳より起り將校も兵卒も。心を一にして。天皇陛下の思召を受け。君の爲國の爲め。奮發する故に。強くして勝つのである。又予は先日廣島に出張し。戦地より歸朝になりし。陸海軍の將校方に逢ひ。直接に戦争の模様を承り。又海軍病院の患者を慰問して。院長より一人く々に付て。其傷を受けた時の模様。其容體を一々承りました。千聞一見に如かずで。京都に居て新聞見たり。話を聞た計りと。直ちに其模様を見聞するとは。格別に感覺を發しました。海軍病院の病人を一々感問するに。僅か九名より患者は居ない。そこで院長に向て。患者は餘程多分ある事と心得たるに。僅に九名ばかりでありますかと

いへば。いや澤山たくさんにありましたれども。輕傷かろきの者は。皆全快ぜんくわいして本艦ほんかんに歸かへりました。最早もはや少すこしくよくなると。今一週間いまいっしゅうかんか二週間にっしゅうかん。保養ほやうせねばならぬと申しても。いやこれで充分じゅうぶんで御座ござる。全快ぜんくわい致いたしました。早く本艦ほんかんに歸かへり下くだされ。何卒なにぞぞ今一働いまひとばたらきせねばならぬと。勇いさみ切きて。未いまた十分じゅうぶんの全快ぜんくわいを待まちすして。本艦ほんかんに乗のり込まれた。今本院いまほんいんに残のこりしものは。重傷じゅうじやうにて到底つまりかた不具ふぐとなるもの計はかりで御座ござると云いるゝを聞きて大おほに感心かんしん致いたしました。負傷けがをして病院びやういんに入り。長々ながく苦痛くつうを受うけて。我々われわれが心こころから思おもへば。最早もはやおそろしく戦争せんじやうに往むかは嫌いやだから。先七日まづなぬかでも十日じふにちでも。此病院このびやういんに居ゐてといふやうな心こころも起おこる歎なげと思おもへど。中々なかなか一寸いちゆんも恐おそるゝ心こころはなく。未いまた全快ぜんくわいにも至いたらぬ内うちから。勇いさみ進すすんで。君きみの爲ために。再またひ從軍じゆうぐんを急いそぐといふ心こころは。實じつに感心かんしんなことである。又また残り九名のこにんの人々は。皆重傷みなじゅうじやうにて。或あるは足あしがなくなりたり。或あるは手て

がなくなりたり。又は一往見かうみた處ところでは何なんの事ことなきやうなるが。精神せいしんが氣きぬけの如ごとくなり。又は雙眼さうがんとも眼力がんりきの叶あはぬと云いやうなもあり爾しかる處ところ。其人々そのひとびとに一々いっさつ逢あて話はなをするに。更さらに歎なげく心こころもなく。悲かなむ氣き色いろもなし。實じつに泰然たいぜんとして。笑わらを含ふみ。最早もはや此身このみになりたれば。再またひ御用ごように立たたぬ事ことのみが殘念ざんねんであります。云いて居ゐらるゝを聞きては大おほに感かんトまらした。實じつに涙なみだを出だすまいと思おもふても泣なずに居ゐられず予よも涙なみだを流ながしました。この患者くわんじや達は。みな黄海戦争くわうかいせんじやうの時の負傷者しやうじやうなり。海軍將校方かいぐんしやうがうに逢あひて。話はなを聞きくに。黄海の戦争くわうかいせんじやうは。日本にほん始はじりて已い來いの初陣しよじんである。西南戦争せいなんせんじやうには。劇はげき戦たたかひもありたれども。皆陸戰かきりくせんなり。實じつに海軍かいぐんに於おては。黄海を初陣しよじんとす。依よて初はじめは。如何いかであらうかと。實じつに心配しんぱいを致いたしたることなるが。實じつに將校しやうがう以下いげ火夫くわふに至いたるまで。非常ひじやうの働はたらき。奉公愛國ほうこうあいこくの志こころざしと一致いっしして。其奮戰そのふんせんの功こう著あしく

勝利を得て。大に喜ぶことであるとの話でありました。則ち九名の患者に對して。一席の法話を致して歸りたることなるが。予はいかなることを話して法話を致したぞなれば。此度の戦争。海陸とも連戦連勝。實に未曾有の慶び事。上天皇陛下の御尊慮を休ト奉り。下四千萬の同胞兄弟。我々まで肩臂張て帝國萬歳と。大なる顔の出来るは。皆これ貴君方の血を流して。奮戦して下された御蔭けなり。依て今日は予は四千萬同胞兄弟の總名代に。御禮に参りたることなり。その御禮には。如何なる物を持参しても。足ることにはあらざるが。天皇陛下よりは。種々優待の御取扱ひ。不足なく御養生あり皇后陛下よりは。義手義足を賜りて。全快後の用を辨するやうと。恩賜もある由に承はる。予は其やうな御見舞。御禮物は。何に一つも参らすことはなほ致さぬが。爰に一つ貴君方に進呈して。永久の寶とし

て貰ひたき物あり。それは何物ぞといへば。此度戦争の爲に。負傷せられしが。天皇陛下より充分の保養を賜り。全快後は皇后陛下の賜の義手義足を以て用を辨せらるゝが。いかんせんこれ幾百年不死といふことには参らぬ。是非に一度は死せねばならぬことがある其時には。いかなる人と雖も。これを救ふこと不能。天皇陛下の御仁惠も。皇后陛下の賜も。命ばかりは義命を賜ることは出来ず。今此病院の院長といへども。命を救ふことは出来ぬなり。然るに此度。彌陀の本願を信ト。極樂往生の由れを領解するときは。彌陀を九のむ一念に。三世の業障罪さめて。正定聚不退轉の位に住し。三十年でも五十年でも。人界ながらへの後。此世の縁のつきて。命終るとき。彼極樂淨土に往生して。命は無量壽にしてかぎりなく。義手義足の手足を補ふ位の事ではない。相好圓滿して。三十二相八十

隨形好を具へて。無量永劫病ことなく。衰ふことなくして。樂みに
 極りなき境界となし下さるは。彌陀超世の本願の御謂である。今こ
 の御謂を聽聞して各自の後生を決定して。今生を目出度終り。二世
 の幸福を得る身となりて貫たるが。予が今日御禮物として。參せた
 き品である。法話をして歸りました。斯のごとく現在出征の人々
 も。又は負傷して病院にある人々も。皆心の中に慈悲が充滿してあ
 るは。其本と天皇陛下の御仁恵が行届き。各自に心を一つにして。
 天子さまの御慈愛を行ふ軍さゆゑ。強くして至る處仁者に敵なしの
 姿たである。さて其慈悲が。一番強いといふに付て。我々が心に慈
 悲を行ふに付ては。種々の障がありて。慈悲を行ふことが出来ぬ。
 所謂三毒の煩惱。即ち貪欲瞋恚愚痴である。この障りあるゆゑに。
 慈悲を行ふて強くなることが出来がたきのである。般若心經に依般

若波羅密多故心無繫碍心無繫礙故無有懼怖」と御説なされて。す
 べて心に障りある故に恐れがある。巡查に逢ふても。身に惡を爲た
 る覺えなければ。更に懼れと云ことにはない。心に惡事の覺があると
 尤ぬ先に自身より懼るゝ。自身に人を偽るとか。又は何を惡き工み
 を爲居ると。人からは顔を詠めはせぬに。顔ながめらると思ふて。
 我身の惡工みを覺られたるか。懼るゝなり。般若波羅密多と云智
 惠の力に依て。心にさはりなく。心にさはりなきによりて。おそれ
 がないとある經文である。これは自力で智慧を磨きて。心のさはり
 を拂ふ法である。又他力の法に依るときは。阿彌陀如來の無碍の光
 明によりて。我々が心の中に無碍になる。光雲無碍如虛空一切の有
 碍にさはりなしとありて。彌陀の光明は。我等一切衆生の心の中の
 惡業煩惱にさへられ玉はず。諸邪業繫無能碍者とありて。いかなる

ものにも障なく依て盡十方無碍光如來と號けたてまつるなり。此光明とは。光明は智慧の相なりとありて。即ち彌陀の智慧の相たるなり。智慧には必ず慈悲を具へて居るから。又智慧の光明大慈悲とおほせられた。自力では智慧を磨て心は無碍にする。他力の法は。佛智より放ち玉ふ。無碍の光明大慈悲の。智慧慈悲具足した光明の力に依て。無碍光のちからより。威徳廣大の信を以て。かならず煩惱のこほりとけ。すなはち菩提の水となる」とありて。心さはりなきゆゑに。おそれおそるゝことなき。決定心を得るなり。この信心は慈悲心とあれば。よわくゝしき信心かといへば。一心すなはち金剛心とありて。いかなる事にもたぢろかず。いかなる者にも妨げられず此金剛心一つで。無上涅槃の證りを開くに間違ないが他方の御由れである。慈悲といふも。自力で智慧をみがき。さはりなくして。慈

悲を行ふことは。中々障が多くして。成就しがたし。他力の慈悲は佛の無碍の光明にて障を消滅して。佛の平等の大悲をもて。衆生の心として。慈悲を行ずるゆゑに。いかなるものも。平等の慈愛心を發して。天皇陛下の御仁惠の御恩に報い奉り。御尊慮を休んト奉り出征軍人に對し同胞相愛の恤義を運はれたきことである。

○佛教即慈善之事 (同上)

本會も昨年六月發起に相成り。本月は第十一會であります。每會出席し。慈善のことを御話と致しますが。中にはいつもく唯慈善のことばかりにて。佛法の難有いことが聞かれぬ。佛法の聞かれぬことならば。この會に加入するに及ばず。何れの所にて佛法の聞かれる處へ參るがよろしと。云はるゝ人もある由が。ちよいくと耳に入ります。又佛法は何れの所にて聞かるゝことなり。慈善の

事を聞く爲にこの會に加入したことであるから。佛法聽聞は常のことなり。この會は慈善の事ではなればならぬと。思ふて居らるゝ人もある容子である。何れも偏りて宜しくない。慈善と佛教と別々の物にあらず。佛教を離れて慈善なく。慈善を離れて佛法なし。佛法即慈善々々即佛法といふてもよろしきことである。何せと云へば。佛心者大慈悲是也とありて。佛といへば慈悲より外の心はない其佛心を世に弘むる佛教なれば。佛教即慈善である。すべてのこと慈悲より發りたことでなくば成就することなし。此度の戦争でも 天皇陛下の慈悲より發りたことゆゑに。戦ふ毎に勝つ。この天子さまの御慈悲が。支那の人間の心の底まで到り届て。了に平和の極を結ぶに至る我々の計り窺ふべき事ではなれども。天皇陛下親ら速に平和の極を結はんことを。希はせられてあれば。必ず速に平和に赴

くことでありませふ。怨を以て怨を報すれば。怨みつひにつきず。草を以て火をけすが如し。恩を以て怨を報ずるは。怨みつひにつく。水を以て火をけすが如しと。御經に説きたまひてあり。若人情の私慾や。怨みをもて。軍をする時はつひに軍の盡きることはない。日本征清は。天子さまの慈悲仁愛の御心より出たる軍さゆへに。到る處悉く勝ち。連戦連勝にして。所謂仁者に敵なしとはこのことである。然るに天子さまは。たゞ御仁徳の御慈悲ばかりで在ても。四千萬の人民の内。唯た一人でも。心得違ひの者が有る時は。あなたを思召を打消し。御慈悲を妨げて。畏れ多くも 天皇陛下の。御叡慮を惱せらるゝに至るやうになる。言はずとも諸君が御承知でありますでせふ。露國皇太子殿下が。御來遊の時は。思ひよらぬ變事を大津に於て出来たるに。天皇陛下には。實に大御心を惱せたま

ひ。態々西京へ御見舞に御行幸あらせられたることは。能く御存知のことである。此度又日清戦争に付て。請和の爲に。支那帝王の使節として。一等肅毅伯李鴻章といふ人が。來朝せられた。兩國大臣彌よ談判と相成りたる矢先に。其使節の大臣を。短銃にて傷つけるといふやうな。狂漢が出て来る。誠に天子さまは叡慮を惱させられ。言をも下させられたことである又文武百官各々大心配をなされ。世界各国。何れに在ても。戦争中に休戦するには。夫々條約の上でなくば。休戦はせぬなり。然るに此度は李鴻章遭難を痛ませられ。何の條約も待たずして。天子さまの思召より。三週間の休戦を仰せ出させられた。この三週間の休戦といふことは。實に甚らしいことである。何の工業場に於ても。器械を備へ多く人を使ふ所に於ては。一日だけ休業しても。容易からぬ損の立つものたといふ。然る

に今陸海軍幾拾萬の。軍人が出征して居らるゝを。其入費の程も顧み玉はず。三週間の休戦を仰せ出さるゝといふは。よく〜深ひ御仁恵である。この御仁恵には。いかな。支那人も感ずるでありませふ。この度のことを聞ては各外國の新聞に。誠に日本は。仁義の深ひ國である。日本の皇帝は御仁徳の勝れた國王である。彌よ皇徳を稱嘆するやうになりました。李鴻章の遭難を聞たときは我々まで憎き無頼の惡漢かな。皇徳を傷け。國威を穢す。大賊となげさましたが。天子さまが惡漢の一人が無分別を仕たことも。たゞ御一人に引受けたまひ。深き御仁恵より。李鴻章を恵ませたまふ。七十有餘の老人が。唯使節となりて來るさへも。大儀なることなるに。かゝる難に遭ていたはしやと。あはれみ玉ふによりて。災が却て御仁徳の耀きとなり。萬國より稱嘆するに至れり。これ御一人の御慈悲

によりて萬國に耀くやうになる。又四千萬人の中に。たゞ一人だけ慈悲知らずの不心得者が有たゆゑ。上御一人より。文武百官に大心痛をかけ。國の大事を引起すやうになりた。一人貪戾なれば一國亂を發すといふことなり。よりてこのことは誰れ一人として。たゞ子供といへども。女などいへども知らずともよいとは云はれぬ一大事である。即ちなければならぬといふ慈善の心の事である。大經には。世間人民父子兄弟夫婦家屋中外親屬當相敬愛無相憎嫉有無相通無得貪惜言色常和莫相違戾と御説なされてある。慈善心さへあれば。互に憎嫉もせず。貪り惜もせず。敬愛して戾らぬなり。然るに慈善は必要なれども。佛法は嫌たと云ふは。光や暖りは入用なれども。太陽は入らぬと云が如し。日輪さまは光りの根本。暖りの根元である。何程電氣燈が明い。三百燭力。五百燭力と云ふても。

日輪が御出まじになりたら。更に光りはない。厚き氷りに何程煮湯をかけても。びくともせぬが。太陽の光り當ると。忽ち本の水になる。何の教にも皆慈善を教ふ慈善は佛教ばかりでないといふは。實の佛教を知らぬ人である。何れにも慈善の教はありても。電氣燈の光りの如く。にら湯の暖りのごとし。佛の御慈悲は日輪の光りの如く。太陽の暖りの如くである。然は慈善が必要と知てみれば。佛法でなければならぬ。殊に阿彌陀如來は。大悲を本として。光明無量壽命無量の願を發したまひ。慈悲心を以て。いかなる惡業煩惱の衆生の心の中までも。碍りなく照して。罪障を消滅して。功德を成就せしめ至らぬところさらになく。照したまふは。光明無量の徳なり慈悲に休みなくして。百年や千年でなく。一世や二世でなく無量永劫盡せぬ慈悲が壽命無量の徳である。この光壽の二徳をもて。我々

の心の中に回向して。衆生の慈善心とし。佛心凡心一體になりて。眞の慈善者となるが。他力信心の行者である。依て慈善が必要と思へば。その慈善を育てるが肝要なり。盆栽一つでも捨て、置ては好まものは出来ぬ。博覽會にても出さうといふに、やうと思へば。中々容易な世話ではない。今この慈善心を育つるには。とても自力の手療治ではいかぬ。他力回向と佛の御心を頂くばかりである。此頃は待に待ちたる博覽會。この博覽會も第四回博覽會開設も。強ち京都に定りたことではなかりた。それには段々論もありたことなれど了に京都と定りたことは切るに切られぬ因縁がありた。夫と云ふは即ちこの京都平安の城を。御開きあそばした桓武天皇。遷都一千百年に相當る。そこでその遷都祭と。博覽會とを。一緒に開くと云ふ處より。此度の次第に相運んだものである。その桓武天皇の詔りに

攘災殖福佛教尤勝誘善利生莫如斯道」とおはせられてある。この京を御開きあそばされた天子さまが。如斯佛教でなければならぬと。詔あるに。其末に生れた。人民が佛教を外にして慈善をなさんと思ふても。到底ゆくことではない。その佛教によりて。慈善を養育するには。蓮如さまも。我身はわろさいたづらものなりとおもひつめて。ふかく如來に歸入するところをもつべしとおはせられて我が心。我身をたのみにし。善きものとおもへば。即ち自力にして慈善の心もなく。佛けたねもない。たゞ慈善を妨げ。佛因を失ふ貪欲嗔恚の煩惱ばかりなり。依て悪さを悪さと知りて。たゞ佛の大悲をたのみ。他力本願に歸入して。佛因を決定し。正定聚の分人となり。眞實に慈善の事業をなすが佛教慈善會の本意である

○無可憐頼について (京都佛教婦人慈善會に於て)

御經の中に。無可憐頼と説ひてありますか。此無可憐頼と申すことは。たのみにすべきことかかないと申す事。人間世界のこと。まことに杖九よりしてたのむべきものはないと云ふことです。言葉を替へて申しますと。あつさないと云ふことです。先月の例會には此處へ孤兒院の子供が来てをりましたが。彼の子供等は。みな子である。頼みのなき者であります。父なくんは何をか恃まん母なくんは何をか恃まん。彼の子供等は。父もなく母もなく。恃むべき者のない孤であります。此外病氣になりて醫者にかゝることのできぬ病院に入ることのできぬ。恃む所のないものがあります。或は子供の中は父母を恃みにしてをり。妻は夫を恃みにしてをり。年をとれば息子を恃みにしてをります。子供の中に。父母がなくなれば。孤と云ふて恃みなきものになります。夫がなくなれば。妻は寡婦と

申して。恃みなきものになります。年をとりにて息子を恃みにしてをりましても。一朝の疾の爲に。息子をとられます。老て子なきを獨と云ふて恃みなきものになります。或は又自分は父母恃みにしたり。子を恃みにしたり。總て人を恃みにすることはないと申す人は自分の腕を恃みにし自分の智慧を恃みにしてをるのであります。ところが不意の出來事。手足を折るとか。智慧が役に立たぬ病氣に取結びたる時は平生恃みにしたる腕も。平生恃みにしたる智慧が。恃みすくなくります。皆様方は恃みすくない者の爲に恃みになりてやる主意で。此の慈善會を興され會金を以て恃みなき者に施して。恃みになりてやる立派なる仕事をなさるお方であるから。恃みすくないと云ふ様なことはありますまい。しかしながら。これも人を恃みませぬと申すことができません。勿論金子の如きは。不足

はありますまいから。此の邊に就ては人を恃みになさることはあり
 ますまいが。或は一家の中で夫を恃みにし。子を恃みになさること
 はありましよう。その恃みにしてをる夫に離れ。子を亡ふたら。誠
 とに恃みずくなくなりませす。夫に離れ。子を亡ふ中はまたしも。自
 分の身が役に立たぬことになりて死せんとするとき。何を恃みにな
 されませすか。實に恃みずくなくあトきなくなりませす。今日は近衛師
 團長北白川の宮の御死去になりましたので音曲御停止の曰でありま
 すが。誠に北白川の宮は千辛萬苦を御厭ひなく。臺灣を鎮定なされ
 もうこのうへは。とゞめをさすといふときの際て。御不幸にも病氣
 の爲にお匿れになりました。私くこの殿下を御見知り奉は。明治
 五年。私が歐羅巴に参りたとき。歐羅巴で殿下を御見知り申しま
 した。今年は殿下は御年が四十五といふことですが。其時は殿下も

餘程御若いことでありました。殿下は獨逸で陸軍の教育を受けさせ
 られ。御歸朝の後。大阪師團長に任せられなされたから。大阪の
 慈善會の會長は。殿下の息所でありましたゆゑ。私も度々まいりて
 息所にお話を申しあげたこともありました。殿下の近衛師團長へ
 御轉任なされた後。息所は大坂に御座りまして。私が御話し申
 じ上げましたことが。今思ひあたることがあります其時私は殿下は
 軍人の身に渡られますことなれば。何時大砲に御かかりになるやも
 知れませぬ。常々より御覺悟がなければなりません。其の御覺悟
 は。佛法でなければなりません。今となりませ
 ては息所も私くこの申しあげた話を。思ひあたられしことと思ひま
 す。實に夫を恃みにしてをりませす。夫がなくなりませす。恃み
 ずくなくなりませす。それよりもまたく自分の身がなくなるときに

は。それはそれは恃みなくなる事です。カチテタノミチキツル妻
 子モ財寶モワカ身ニハヒトツモアヒソフコトアルヘカラス。身分の
 手が役に立ち。身分の足が役に立ちて。自力の恃む所がありますな
 れば。私くは御勸め申しませぬが。自力の恃みがありますねなら
 是罪共佛の力を恃みにするよりほかはありませぬ。恃みにする所が
 ありませぬと。實に後悔をなさることがあります。轉ばぬ先の杖。
 死なぬ先に恃みにする事がありません。それで轉ば
 ぬ先の杖といふことを御忘にになりました。よりにて惠燈
 大師はこれによりてたゞふかくねがふべきは後生なりまたたのむべ
 きは彌陀如來なり信心決定してまいるべきは安養の淨土なり」とお
 はせられました。いよく一人くんに畢竟の歸みとなることを。
 覺悟してをかねばなりません。

○大阪別院婦人教會演説

今日は明治廿九年となりて始めての婦人教會の例會にして。なにか
 私に話をせよとのこと。就ては年の始めのことでもあれば。目出度
 話をしたいと思ふから。寶と云ふことに付て話しまじやう。寶と云
 ふは貴重すべきもの則ち寶なり。處が衣服にせよ。食物にせよ。家
 屋にせよ。皆價ありて貴重すべきものなれども。これを財寶といふ
 財も寶も或は貨幣の貨の字も。悉く貝邊又は貝と云ふ字が下にある
 此れは如何なる譯ぞと云ふに。當時の貨幣は金銀。若しくは銅なれ
 ども。往古は金銀等の出ぬときは貝を一般に通用せしと云ふ。此云
 ふ處より財も寶もみな貝邊を書き又は貝を下にするのである。
 今日では金銀等を一般に通貨と云ふが。此れはなせであるかと云ふ
 に。衣食の如きも。成程寶には相違なければ。此れは各一隅を守る

もので。衣は着る爲の衣にして。之を喰ふと云ふ譯に行かず。又食を以て着ると云ふ譯に行かぬ。夏の衣類は冬の爲にならず。冬のものは夏のものにならぬと云ふ様に。各一般に通用することは出来ぬ。饑れば食。渴すれば水と云ふ如く。一方には用に立てども。他一方に於て役に立つことは無い。然るに金銀の如き貨幣は左様のものではなく。之を以て衣に代ることも出来。食に代ることも出来る。則ち廣く一般に通用す。故に現今にては金銀等を以て寶と致す。外國との交通始まれば國の内外に通ずる。實に人類一般に通用するものにして。此ぞ寶と云ふべきものである。以上は有形上の寶の概畧を述べました。是より一歩進んで無形上の寶は果してなんであるかと云ふことを述べまじやう。

さて無形の寶とは何ぞ。是に就ても一方に於いては役に立てども他

の一方に於て役に立ぬと云ふ様なものは通寶にはあらず。要する所之を古今に通ト中外に施して。かはらぬものこそ眞實の寶である世人動すれば人間の道は幾通りもある様に思ふ。則ち親に事ふるとか君に事ふるとか。又は朋友に交るとか。斯様に數ある如く思ふが。此れは別々の者ではない古人も一以て之を貫くと申して。人間の道は唯一のものである。而してそれは忠恕とあるが即ちことの心。信の一字これ實に人間の道に於て寶とすべきものと思ふ。彼の金銀が衣にも代へ得べく。食にも代へ得べきが如く。人々が信を以て君に事ふれば忠となり。之を以て親に事ふれば孝となる。君に事ふるの道は知りて居れども。親に事ふるの道は知らぬと云ふ譯けはない。要する所君に事ふるも。親に事ふるも。親が子を養ふも皆信を以てすれば道にかなふ。信は何所に向けても宜きものにして。實に人間

無形上唯一の寶である。金銀が何方に向けても通ずるが如くに於て此の信と云ふ道は。古今内外に通じて貴重すべきものである。去る明治廿三年の勅語に爾臣民父母に孝に。兄弟に友に。等と仰せられて。終りに至りて此の道は皇祖皇宗の遺訓にして。之を古今に通じて謬らさず。之を中外に施して戻らずと仰せられた此れは何所にも通すべき道にして。いつも變りはないことである。彼の外國は人種も異なり風俗も異なれども已に中外に施してとある以上は外國に於ても宜しく行ふべき道である。人有形の寶を寶とするのみではゆかぬ無形の寶も亦寶とせねばならず。有形の寶を寶とさへすれば無形の寶は粗末にしても宜しと云ふことは決してない。金銀の寶なければ食に代ふることも出来ず衣に代ふることも出来ざるが如く。人苟も信と云へる道を失へば。世に立つことは出来ぬ。斯様に話と來れば

信は實に貴重すべき人類の道たることは承知せられたであらふ。孔子も曰はれたることあり。兵を足し食を足し民之を信す」と。我邦一昨年来清國と戦争ありて。海に陸に勝利を得て。遂に臺灣は我版圖に歸するに至る。去乍猶此上にも。軍備擴張もせねばならぬが兵を足すのである。また此上大切なるものは食を足すと云ふことで國を富すと云ふことが肝要である。自分一人の富を思ふてはならぬ國を富すことを心掛ねばならぬ。斯様に兵足り食足れども。民之を信すと云ふことがなくては國は滅亡を免れぬことである。故に或人が孔子に向ひ不得止して其の一を缺くときは。それであると尋ねるとき。孔子は無詮方三者の内一を缺んには。兵を去ると云はれた。又た残り二つの内不得止其の一を去るときはそれかと尋ねると食を去ると云はれた。而て古より皆死あり民信なくんば立たずとありて

設令食あるも人の人たる道を行はざる時は。生きて居る所詮はな
 い。食なければ餓ゆれども信と云ふ道缺けてはならぬ故。設令餓々
 ても信と云へる道は守らねばならぬ。そうして見れば信と云へる道
 は世の中の寶なることは明白である。
 斯様に信は人類に於て要用のものなるが。さてそれは何様して守ら
 れるか。世には是非守らねばならぬと云ひながら守らぬものあり。
 守り度いと思ひつゝ得守らざる者がある。かくの如く守らねばなら
 ぬと思ひ。守り度いと思ひながら得守らざるには大なる譯けのある
 ことなり。則ち各自固有の私心私欲あるに依りて。人間の守るべき
 道も守り得ざる次第である。依て此の恐るべき私欲則煩悩を退治す
 るは。頗る必用のことにして。大奮發して退治せねばならぬことぢ
 やが。如何せん我々の力にては中々退治することが出来ぬ故に。佛

ありて我等が爲に此の恐るべき煩悩を退治して下さる。然れば佛の
 道に皈するが第一番の近道なり。否佛の道に皈せざる以上は我々決
 して此恐るべき煩悩を退治すること能はざるものである。
 此の別院に婦人教會の設けありて。毎月開會あるも畢竟する所此の
 近道に入込む爲である。佛の道は實に無上の寶なり。唯今世一代の
 爲にあらす。過去の過去より未來の未來に通つて誤らざるが佛法で
 ある十方世界へたてなく行はるゝが佛法である則ち三世十方に通つ
 ての寶と云ふは實に南無阿彌陀佛のまことの外はない。依て吾人の
 心の淺まらさが承知出来たる時は。早く佛に歸して信心と云ふ無上
 寶珠を得ねばならぬ。此の年の始めに際して目出度き寶を得られん
 ことを希ふ。此佛法の信心と世上に守るべき信とは眞俗の異はあれ
 ど。自然と其本を一にするから信心決定の人はおのつから人倫を守

るの妙用がそなはります其ことは又追て御話いたしましやう。

○大悲を愛する者は小悲をも捨つべからず

(京都佛教婦人慈善會に於て)

私は初めより發起人の一人ともなりて。本會に關係して居りますが本會は創立の當時より。會員は續々澤山に加入の御方はありますが毎月例會の節には。誠に御集まりの御方がすくない。尤も今日は雪も降りまして。寒のあきから今日はさ冷ゆる日はありませんから。今日は寒いから内に引き籠もりの御方もあるのでもしよう。併しながら今日は暖かいから會へ出席しよう。今日は寒いから内に引き籠ろと云ふ様なる慈善では。誠に慈善ではありません。こんな慈善はまづい慈善である。皆様の如く今日の如きひゆる日もお厭ひなく。御出席の御方はまづい側ではありません。出席せざる御方がまづい

側である。今日御出席の御方にこんなことを申すと不足を云ふ様であります。皆様に不足を云ふのではありません。御出席のない御方の御名代に皆様に云ふのです。此の慈善會は。固より一宗一派にかたよらずして。佛の教を聞かれる人は。何宗の信徒でも喜こんで加入せねばならぬのである。廣く之れを申せば。孔子の教でも神道でも。此の慈善と申す會には加入せねばならぬのである。それに佛の教の中でも御寺まゐりとか。御講とか。又は淨土宗にては。別時念佛とか。受戒とか申す時には。人の集まりも澤山あるに。此の慈善の會には集まる人がすくないのは。なげかはしいことである。抑も佛の教を信するは。何宗にかぎらず。佛に成るの目的である。聖道門にては。自力修行して此土に於て佛に成り。淨土門にては。未來に於て淨土に往生して佛にならして頂くの目的である。其の佛は慈悲

のかけた佛ではない。慈悲さらひの佛けではなく。佛心者大慈悲。其の大慈大悲の佛になるが。佛法を聞く者の目的である。それに此世の申の近き慈悲が嫌ひと云ふやうなことで。大きな慈悲のある佛になるは六ヶ敷いことである。私くは壹萬圓の金は欲しいが。壹錢や半錢は欲しくないと申す様なことでは。壹萬圓の金のでけることはない。壹萬圓の金も壹錢や半錢を積み集めて千圓となり。壹萬圓となるのである。佛は萬徳圓備の御方であるが。其の本は矢張り小さき功德の集まりて。萬徳圓備の大慈悲の佛けになられたのである。論註と申す御聖教の中に。こんな話がある。獨りの盲目の比丘が袈裟を縫じときに。鍼の糸がぬけた。其時に盲目の比丘が功德を愛する者がありて。我が爲に鍼を維して呉れるものがないかと言ひたるときに。釋迦牟尼如來は。禪定より起ちて。其所に到

り。右の比丘の爲めに鍼を維し給ひた。爾時右の比丘は。佛の語聲を聞き知りて。驚て佛に白すに。世尊は已に功德圓滿の御方であるそれに今私くは爲に鍼を維して下さるは。あなたの功德の猶不足な所がありてのことでもありますかと。御尋ね申したら。佛は我が功德は圓滿にして。缺けたる所はなけれども。但我此の功德圓滿の身になりたるも。本は矢張り小さい功德より成り立ちたものゆゑ。功德圓滿の身になりても。猶ほ少い功德をも愛することであると申された。故に壹萬圓の金を拵へるは。壹錢半錢の微細より積み立る如く。功德圓滿の佛けになるも。小さい功德の集りてなることぢや世の中の人。變な考を持ちておる者がある。佛になると云ふは。自身一人成佛すればよいのであると思ふておる人がある。それは大いな間違である。佛になると云ふも。自身一人でなく。一切衆生を

濟度するもの故に。佛になると云ふも慈悲は離れぬのである。佛の眼より見れば。一切衆生に因縁があるから。誰一人を助けて。餘の者は棄てゝおくと云ふ譯に行かぬのである。甲も乙も。誰もかれも濟度しやうと云ふ慈悲であるから。之を平等の大悲。同體の慈悲と申すのである。吾人は時として慈愛の念を起すも。家内のものとか親戚の者とか。其の區域は甚だ狭い。佛は一切衆生を見ること。自己の手足の如くあるから。一切衆生にすこしも差別はないのである。天皇陛下が日本全国の臣民を御覽なさるに差別はない故に。京都人は美濃に地震がありても。京都にさへ地震がなければそれでよいと云ふ考へなれど。天皇陛下は京都の地震も美濃の地震も。すこしも差別はないのである。佛は一切衆生を濟度なさるから。甲も乙も差別はないのである。其の大慈大悲の佛になる目的の我々であるから

少い慈善を棄てずに。喜でせねばならぬのである。其少い慈善でも關係する所は。誠に廣いのである。喩を取りて云へば。美濃の大震災のときに。米國の海岸には海嘯が打ちたと云ふことであるが。果して日本の地震の影響が米國の海岸に波及したか。さうたか分らぬけれど。日本の大地が動揺してそれが海水に波及して。彼の方へ行く理のないとも云はれますまひ。又朝鮮の出來事が。日本人に影響して貿易株式等が遽に下落し。米の相場が高くなり。裏屋に住んである貧乏人まで困りて呉ると云ふ影響が及ぶ。人間世界の事さへ。一方の出來事が縁も契りもない遠方の者にまで響が行く事である。少くも可笑しな話とでありますけれども。昔より大風吹けば。桶屋喜こぶと云ふ諺がある。それは何故なれば。大風が吹けば屋根を破り家を倒し澤山に桶の輪を切るから。それで桶屋が繁昌すると

云ふのです。又は大風吹けば鼠が喜ぶと云ふ話にもある。大風が吹くと。砂や小石を吹き飛ばし。道ち行く人の眼の中に入り。人は竟に盲目となり。三味線を稽古する。さうなれば三味線が能くうれるから。猫の皮を剥ぐ。猫がなくなるから。鼠が喜ぶと云ふことにならるのであります。しかしながら鼠が喜ぶだけでなし。大風が吹けば臭服屋も喜ぶ。何となれば。右の通り猫がなくなりて鼠が繁昌すれば。衣服を噛る。さうなれば臭服屋へ行て。新しき衣服を求めるところで臭服屋が喜ぶ。之の如く甲の出来事が乙にも丙にも及ぶと云ふ様なことであるから。故に少しの慈善でも其の影響の及ぶ所は大變なるものである。佛の大慈大悲は。世界到る所の衆生に縁がかるから。一衆生の悪あれば。佛はこれを憐み玉ふ故に一切衆生を差別なく慈悲を加へ玉ふから。平等の慈悲と云ふのである。我真宗

にては。我が力を棄てし。平等大悲の境界に往かして頂くは。偏に佛の慈悲である故に。此世に生存する間に。佛恩報謝の爲め。少々な慈善も。はまりてせねばならぬのである。一家讓一國興讓一人貪戻一國作亂」たとひ一人なりとも。少しの慈善なりとも。はまりてすれば其の影響は。實に大變なる廣大のものである。

○慈善は獨できぬもの (京都佛教慈善會に於て)

先月の會日には。本會の三週年の御祝にて。雨天でありたれども三百五六十名も御集りでありました。本日は雨もふらず。風も吹かず。至極よき天氣なれども。御參集の御方が至つて少い。これ全く暑の酷きゆゑでありました。諸君も暑くありました。私もあつて耐ませぬ。暑は金でもとろかすといふが餘りの暑に慈善心までも。とろけて仕舞ましたと見ゆる。併しこれは今日參集せられぬ

會員のことで。本日かく暑を顧す御集の方々は實に慈善心堅固にて。いかなる暑さにも障碍す不缺に御集りは。慈善會員の慈善會員たる眞面目にて。誠に感心すべきことであります。併し慈善はひとりできぬものであります。所對の人すなはち其相手がなくてはできぬことなり。海嘯とか地震とか。或は孤兒とか窮民とか。困難に逢ふて居るものを見て。物を施すを慈善といふ。これも慈善は慈善であるが。こればかりが慈善でない。我は慈善會員であるから。會金さへ出して難義な人のある時。施しさへすればよいと云ふて居ては慈善心に虧けたところがある。すなはち先日も話の出来た通り。學佛大悲心であるから。佛は自覺々他覺行究滿とて。我身ばかりさどるでない。他人をことごとくくさどららむるが佛である。それを學ぶ慈善會の會員であれば。我身さへ慈善心があればそれでよいと云

ふて居ては。慈善心が充分したとは云はれない。この會の會員も數多あれども。一旦ありた慈善心も。或は暑の爲にとけて仕舞ひ。或は世事に障られてなくなりて仕舞て。會金さへ出せば慈善會の會員たと思ふて居る。心得の違ふた人の心得を直し。參る機のない人を誘ふて參るやうにするが。すなはち慈善心である。人の心得を直すと云ふても。たゞ八釜敷。いはゆる姑の嫁をいぢるやうにいふても人は信用するものでない。自分に難有と信ト喜ぶところより。親切の心をもて人を誘ふときは。心なき人もその誘はるゝ人に免トて參るやうになる。世間のことで。人が度々誘ふて呉ると。その人に免トてあの人があればほかにいふて下さるからと云て。終にその人に從ひその道に入やうになるものである。今も佛法聞くころもなく慈善心もなき人でも。實意から度々誘ふときは。參る心なき人も。

誘ふて下さる人の親切に對して。義理にても參らねばならぬやうになる。參りて見ると難有道理を聞き。佛法を信じて佛の大悲心を學て。眞實の慈善心を起すやうになる。それだけの慈善心もなくて。唯我身さへ聽聞して喜んで居ればよいといふ有様では。慈善心が解けて仕舞たといふ迄にはなけれども。慈善心に虧けた所があるといはねはなりません。さて其慈善心の起るといふに附て。先月すなはち七月十五日に大阪三軒屋の紡績所へ行て大に感慨心を生じたことを御話致しましやうが。或日紡績會社の會社長が來りて。何卒私の會社の職工に。難有御話をして御聞せ下されたいとの頼みに附き。予もいまた行ぬ所であれば。そんな容子が行て見たくもあり。請に應じて約束して先月十五日に泊がけに參りました。尤も夜をなければ話が出來ぬ都合で。千人ほどの職工が。晝夜交代にて。朝六時よ

り晩六時まで。六百人はと仕業する。午後六時に交代して五百人は朝の六時まで仕業する。その午後の六時に休で。晩の食事をする時食堂に集りた者に話を致し呉れとの頼みであるから。其食堂に人の揃ふを待て。案内を受けて食堂に入て見れば。五百人が。うちそろひあるを見わたすに。一番少年が十二歳より。年嵩のものが二十二三歳なり。平均していへばまづ十八九歳位といふべき有様である。ところがそろく話しかけると。晝の勞れと聞ても分らぬとによりて。ふらく頭をふりて眠るあり。中にはがうくと高鼻息を出すものあり又は少々は眞味に聽聞して感動の色を顯すものもあり。該てこれをいへば。幼少の時よりかゝる職工などに這入て居るものは。更に教育のなき者が多い。これまでの教育がないと聞ても分りませぬ。予か手許に於ては。餘ほど注意して和けんと。易く合點の

いくやうと。思ふても。それが中々分らぬ様子である。話了りて職工の寝る處を一覽しますに。十五疊敷の間が五拾間ほどありて。其十五疊の間に拾二人づゝ厚き大なる蚊張をつりて寝るよし。まこと蚊の澤山居る處にて暫く話して居る間にも。目にも鼻にも口にも蚊の飛込位の土地に。食事する處から寝るところのありさまは。悪くいへば監獄の囚人の少し自由の叶ふ位のありさまである。又業を仕て居る處を見れば。五百人の職工は各々器械に對て油斷なく仕業して居る。器械の音すさまじく。先夜の如く鳴り通しの雷も更にきこゆぬほどにて。器械の音は雷よりも劇く。温度百度位にて聞けば寒中にては百度位のよしなり。我々どもは一時そこに居ても腦病を起す程である時々職工も腦病を起すものもあるよし。かゝる中に汗水になりて。綿ほこりにまぶれて。夜通に勤苦て居る。會社長

に逐一子細を聞くに。まづ三年位の約定にて。恙なく年期を終へば參拾圓とか。五拾圓とか。金の出来る方法の規約はあるよしなるが然し年期終りて出る時は。其金も着物とか帶とか。紅白粉等に空く費して仕舞ひ。元の手振で歸るものが多きよしなり。これらの人のことを考へてみると。その身ひとつを養ふ爲に身心を苦め。哀れ淺間敷日送りをして。剩へ心を養ふ教育といふがなきがゆゑ。善法を聞ても分らず。心を養ふ食物までなき身も心も貧困の人である。この有様を親く見聞して。大に感慨心を起したことであります。諸君もたゞ獨り我身の上のことばかりを思ふて居ると。慈善心は發らぬ。あれ思ふても不足。これ思ふても不足。何を考へても不足ばかりが起りて。慈善所でも。施しどころでもない。起る心は愚痴と貪欲ばかりである。外の人の上を考へて見ると。かゝる身は苦役れ。

心に教育の食物を失ひ。實に貧困の極りといはねばならぬありさま
 それを思へば我身はと仕合者はない。今日身を養ふに不自由なく。
 心は佛の大悲をもて養育されて自利々他の心を起すといふは人多き
 中の稀有人である。この身の上となりたれば。その道を知らぬ人を
 誘ひ導て會員は勿論。他の人々までも誘ひ參詣して。共に同く平等
 大悲の佛の教を聞て。同く學佛大悲心の慈善家にならねばなりませ
 ぬ。若もこの心が起らぬ人であるならば。無教育の人で心を養ふ食
 物のなき貧困も。少々の違はあれども。やはり心に虧けたところの
 ある。貧困人である。依て自身ばかりを思はず。他人の上を思ひや
 り彼の相手に對ふて慈善心を起し。人を誘ふてこの道を聽聞させる
 が慈善會員の務めであります。この法を聞さへすれば。必ず佛の大
 悲心より慈善心が生するのである。宿善開發であるから。一度より

二度。二度より三度五度と。幾度もく重ねて聞ねばならぬ。それ
 はとよき事ならば。一時に澤山聞て置たらよからうにと思はるゝで
 あらうなれども。さうはゆかぬ。何程體を養ふに必要の食物といふ
 ても。一時澤山食して置て。三日四日も食はずに居るといふことに
 はならぬ。何ほど面倒でも。毎日々々三度づゝ食はねばならぬ。行
 水もその通り。好きな酒を呑むもみなその如くで。毎日々々度々に用
 ひねばならぬ。何ほど結構な藥でも一度吞でそれでよいといふ譯に
 はゆかぬ。今も一度に何ほど聞ても教育のなきものには分らぬこと
 く。聞ても會得が出来ぬ。幾度もく座を重ね。縁に逢ふて聽聞す
 るのでいよく明に聞け實の道を會得するのである。みなさんがこ
 の慈善心を養ふて。會員悉くこの慈善心になられたれば。それが即
 ち慈善會の盛になりたといふものである。

○佛法と世法

(東京橋町説教場に於て)

却説私が御咄致さんと欲するは。佛法と世法との關係と云ふ事でありて。今之を別々に分析すれば。佛法とは佛が御説なされた教なれば。廣く申さば釋迦一代の説教。此の中に攝在し。所謂人天教もあれ共。今申すのは只た佛に成る法と云ふを佛法と申すので。畢竟世法に簡で申したものの。又世法とは吾人各々の世法の法で。人間一生涯生活の法を世法と名づけるのであり升。尤も世間には色々な思想を抱く人がありて。世法の法として別にあるにあらず。只た己の欲する所を。思ふ儘實行せば可なり。自分さへ宜ければ他を顧みるに及ばず。杯と申す輩もあるけれ共。是れは所謂無法と云ふべき事也。吾人が此の世の生活には。必ず世法と申して一の法則。即ち仁義道德はなけねばならぬ

此佛法世法と申す事は。往昔から申傳たる事にて。御文章の中にも佛法世法に就けても。千萬迷惑の折節なりと。仰せられた然るに斯く佛法と世法とを。別々に并べ。分析する時は。兩者全く個々に離れて。敢て一致する場合なき様なれ共。之は決して兩者別々に分離すべきものにあらず。即ち佛法から申せば吾人の今日の世渡が。取も直さず佛法でありて。佛法が世法に及んで。心易く安樂に世渡が出来。即ち稼業渡世の其間も。佛法の力に依て知らずく眞の道に叶ふ様になる。是を世法が佛法の本旨に稱ひ。佛陀の眞意に契合する者と申さねばならぬ。先づ世法が佛法の本旨に契ふと。云事を御咄致さん。凡そ今日世渡をするに。若も我身計の事を謀りて。他人の困難も意とせず。所謂利己主義でありたら。如何でありまじよ。中く吾人安樂の生活は出来ませぬ。之を孟子に書てある。孟子

が梁の惠王に見た時に。惠王の云れるには。叟千里を遠とせずして
 来る亦以て我國を利せんとする乎と。云はれたれば。孟子は直に其
 利の字を取捕へ。王何ぞ必利を云はん。亦仁義あるのみ。王若し我
 國を利せんと云は。大夫は吾家を利せんとし。士庶人は吾身を利せ
 んとし。上下交々利を征し。國危からんと。所謂利と利の争が起
 り。我儘氣儘。勝手の事のみを欲望する様に成り。遂には一國も危
 きに至らん。故に孟子は初から利の一字を以て惠王を叱付た。つら
 く今日社會の實況を目撃するに。鐵道布設や水道改良。其他萬般
 の事に付ても利己私益の論多く。敢て社會公共の大益を計るの觀念
 なさが如く。只斯せば自己の利益。又は私利の利得となると。種々
 様々の事業を企てつゝある様なるが。實に困たものではないか。反
 之日本國家の爲め。若は東洋全軀の爲めとか。申す如き事ならば。

至極結構なれ共。苟も自己一身さへ利せば。假令他に非常の災害を
 蒙らするも顧みるに足らずとするものは。實際世法に契たものとは
 申されぬ。然らば如何せば果して世法に契ふや。豈何ぞ利を云はん
 只仁義あるのみ。人立て我立ち。己の欲せざる所を人に施さず。己
 達せんと欲せば。先人を達せしめよ。則ち己の好む所を人にも分配
 し。共に仁義道德を全ふして世渡をするか。即ち佛法と契合する所
 である。中古中務親王の御歌に「世を治め民を助くる心こそやかて
 佛の教なりけれ」と仰せられたが。佛法世法如此密接の關係を有し
 て居るのである。

然るに斯く申さば。世法既に佛法の眞意に契合せば。何を煩はしく
 佛法の必要あらんと。思ふ人あるやも難計が。之れは決して左様で
 ない世法は淺くして一旦のもの。佛法は甚深微妙にして。容易に窺

ひ知る能ざる尊ひものである。譬へば皆さん方が京都に行かんとするには。必ず横濱から静岡。名古屋を経過せされば達する事は出来ぬ。即ち横濱は京都行の一分の道なれば。吾は京都に行くのに。横濱に用はなひと申して。横濱を通らぬ譯には参らぬから。是非横濱は必要である。依て世法は横濱又は名古屋の如く。佛法は京都の如し。故に方角を違へず人倫の道を履行せば。佛の都に到ることは易ひ。若し方角を違へ大宮小山の方に行くが如く。人間の世渡の方角を違へしならば。佛果の證には段々遠くなり。佛法世法離れくに成て仕舞から。世の中は何事も國家の爲め社會の爲と心得。各々其職業に出精せば。自然知すくの間。我身も利益を得。人をも助けて。共に安穩に生活せられ。佛陀の本意に契ふ様になる。扱て次に佛法が世法に關する事を御話致さん。此の事は餘程心を沈

めて聽聞して。貰ひ度い。凡そ世の中には吾は佛法を聽聞し。後生の大事を決着すれば。最早此世は如何でも宜し。商賣をすれば損をし。女房を持てば死で仕舞。子孫はありても心の儘にならぬ。財産を貯へれば心配の種子計りと。遂に世を厭ひ世を捨てし。此の世の事は顧みぬ人も。間々ある哉に見及ぶが。之は大な間違であるぞ。若し如此ならば世法が成立たぬ。畢竟如此妄想は。佛法を以て世法を捨つるもので。佛法の本旨に背て居る。依て蓮如上人は此度の往生を決定して。其後は人間の有様に任せて。世を過すべき事。肝要なりと仰せられたれば。宜しく注意すべき事。特に吾が眞宗信徒たるものは。決して世法を無視し世を捨てしはならぬ。即ち軍人は軍人の勤め。商賣人は商賣の道に勉強して。國家の福祉を企圖せねばならぬ。今一證を擧て御話致さん。此の事は少く佛教とは縁遠ひ

事の様なれ共。實際は甚た近ひ縁のものである。其は他にあらず戦
 争である。先つ佛教聴聞の人は。觸光柔軟と申して一度如來様の
 慈大悲の光明に。照されたるものは。身心共に柔和温順になるもの
 なるに。戦争は鬼をも取ひしく荒く敷働を爲し。人を殺す事を何
 とも思はず。殺氣勃々恐るべきものなれば。佛法と戦争とは全く正
 反對の様なれ共。其實際に至ては相一致して。決して離るべからざ
 るものであり升。昨年日清戦争の起りし始めに當て。吾本山其他各
 宗僧侶が從軍布教を願出た頃は。念佛は戦争の助にはならぬ。寧ろ
 從軍は止めた方が可ならん杯と人によりては冷眼以て看過する有様
 なりしに。其後段々と申立て戦争愈々劇烈なるに及で。各宗僧侶從
 軍して。一は死者を吊ひ負傷者を慰藉看護し。一は佛教の眞理を演
 説して。士氣を鼓舞して。安心歸着の點に達せしめんと勤めしに。

實に功果空しくからず軍人の志氣益々興憤。勇氣百倍して。遂に支那
 をして和を請はらむるに至り。遂に蠻徒の頑夢を破り臺灣を割讓し
 て。漸く其局を結ぶに至りしは。皆さん方の御承知の事なるが。之
 を以て佛法が世法を助け。加之佛法は戦争の邪魔するものにあらず
 却て大に戦争を助けたる興奮劑なりと云ふ事は御分りに成りまじよ
 果して然らば吾佛教信徒たるものは。將來益々振て佛恩報謝の爲め
 國家公益の爲めに働かねばならぬ。

然るに全軀戦争は凶器と申して。猥に爲すべからず。能べくんば之
 を避けねばならぬ。けれ共事苟も國家の平和を破る場合に至ては。
 最早用捨すべきにあらず。一撃の下に暴漢を膺懲せねばならぬ。戦
 争は實に恐るべきものなれ共。其目的は人を殺すのが主要でなく。
 只た眞の目的は。平和に過ぎなひ事であり升から昨年天皇陛下の下

したまひたる。宣戰の詔勅を拜見し奉るに。只初より平和くと仰せられ。朕は平和と終始して今日迄繼續し來た。豈計らんや。暴清は此の平和を傷り條約を無視する故。戰を宣するの止を得ざるに至れり。朕は汝有衆の忠實勇武なるに依頼して。速に平和を永遠に克復せん云云との玉ひ。平和の二字を以て結び玉ひたが。僅二年足らずの間に。平和を克復し領土を擴め。空前絶後の偉勳を奏し玉ひたるは。偏に陛下の御稜威の彌高きと。一は陸海軍人諸士の賜と。吾人は深く感謝せねばなりません。

彼の豊公の朝鮮征伐は。前後十一年間にして。夫も豊公が尙生存してあれば。またく續くかも知れなかつた。夫れに就て或人は豊公の朝鮮征伐は一夜で濟たと申す故。他の人之を辨難致したるに。實は私は一夜の間の講釋を聞たから。一夜で濟んたかと思たと申した

そふな(大笑)が實は十一年も掛て。實際平和も出來す。又領土とも成らなかつた。然るに此度の戰爭は。實に速に且永遠の平和を克復し。剩へ領土を擴め。國威を宇内に輝かしたから。實に天皇陛下宣戰の思召にも。又佛法の眞意にも契ふ譯であり升から難有事です。

終に臨で一言致し升。全軀佛法を聽聞するものは。佛陀の御慈悲に浴し。身心共に柔和に成るから戰の役に立たぬと。昨年迄は申す人もありましたが。佛法は決して左様のものぞなひ。正しく此度の日清戰爭に依て。正反對の結果を顯しました。即ち各宗從軍布教使等の熱心なる演説を聞き。能く安心立命したものは。戰場に出ては最も猛烈にして。決して退怯の念なく。著しき功勳を奏しました。抑々之れは何故でありまじよか。他でもなひ。佛法を聞き安心立命の人は。此度の往生を決定し。毫も死を恐るゝの念なく。只た死は鴻毛

より軽く。義は山岳より重しとの聖訓を服膺せしに職由せしは。明白の事實であり升。されは皆さん方。今度の戦には莫大の人命を失ひました。併し國內に在ても。虎列刺病の爲に五萬餘の同胞斃れました。等しく死には相違なきも一方は國家の爲め。一方は病の爲に野垂死を致したものと云ても宜しからん。願くは皆さん方。是からは我家に空く野垂れ死をするよりも。國家の爲に斃れる覺悟を以て世を渡らねばならぬ。尙御信心を大切に。眞俗二諦の宗意を守ることが肝要であり升ことは次席に説教に致します。

○暑を凌ぐの方

暑氣をも厭はず。よろこそ御參集になりました。(中暑) さてまこと厳しい暑さで御座ります。今日は各位に暑をしのぐの方を御授け申したいと思ひます。就ては古人の句が御座りますが。其句の

出處は。昔の支那人の詩で御座りまして。昔或る禪僧が山寺に住んで居りました。其山寺に尋ねて行きますと。尤も山中ではあるけれども。外の涼しくありて。どうも人間の住居とも思はれぬ様である。何様云ふもので此様に涼いのであるかと尋ねたら。これは何も別のことで無いが。心すくすくして境おのづからすくすくさわけでありて。心の静にしてすくすくさの境にあらはれて。境界もおのづから涼きのであると云はれたことがある。又それよりまた古い處に静勝熱といふことがありて。安靜にして居るのは暑熱に勝つ所以でありて。静は熱に勝つといふことがある。これは實驗すれば直に分ることでありて。いかにも身體を静にして手も動かさず。足も動かさず。まるで死んだ人の様にして居ると。動いて居る様には暑くないものでありて。暑氣をしのぐのには身體を静にして居る

のが第一番である。今日御出席なき方々も。或はこの方によりて。出て暑い目をするよりは。家に静にして居る方がよいといふことで出て来られぬのかも知れぬが。これは尤なることである。しかし。身體を静にするのは心を静にするに如かぬ。心をしづかにせねば。身體ばかり静にしても無駄である。心のはたらきといふものは。暑らしいものでありて。身體を静にして居りても。心が落着いて安らかなりて居らぬと。身體を動かせるのと同様に熱い。其證據には身體は静にして居りながら。腹の立つ時などは。手を動かせ。足を動かせると同様に熱い。又人と談話などをして居りても。あ。ともた。此事を云ふのではなかつたのになぞと思ふた時には。脇やら背やらに汗をかく。又はづからしいと思へば。はつと顔が赤くなりて汗を發する。これらは身體は静でありても。心のはたらきはきつい

ものでありて。わづかに腹が立つとか。はづからしいとか。失策をしたと思ふ様なことで。直に其心が身體中を走り廻る様に。身體にあらはれて出る。ゆゑに身體ばかり静にしても。心を静にせねば。役にたゝぬ。そこで古人の句に「夏の日や心ひとつの置處」と云ふてある。如何にも心ひとつのおきどころでありて心さへ安靜と。しづかな處に落着いて居ると。たとひ身體は動かして居りても。さはさ熱く感ぜぬ。又こゝろが落着いて居らぬと。身體を静に保つて居りても。熱い〜と氣があせつて。苦しいてならぬ。どうぞこの苦しのがれたいと。あせればあせるほど熱くてならぬ。それで夏は熱いものである。熱いは當前のことであると思ふて。心を静に落着けて居ると。其割合に熱くない。それを斯様熱うてはたまらぬ。どうぞしたらは熱うないであらうかと心をあせれば。あせる程涼しくない

これを夏の日やこゝろひとつのおきどころと云ふたものである。臺灣の暑氣は熱いに相違ないけれども。彼方に行て居られる方は。臺灣の熱いのは當前であると覺悟をして居られるから凌がれる。それを若も斯様熱うては堪へられぬと云ふ様では。兎ても凌いで行くことは出来ぬ。又遼東半島は寒い。鼻や耳が凍りて落ちる程のさむさであるけれども。廿七八年の戦争の時なども。遼東半島の寒いのは當前のことであると覺悟をして。御國の爲に死すべきのみと覺悟したる人の上においては。左ほさにも感せぬ。これらも皆こゝろひとつの置處である。前に諸君に暑をしのぐの方を御授け申すと云ふたも別のことではない。たゞこの心ひとつのおきどころと云ふことを合點して。心を静にたもちて。而して暑いから身體を動かさずに死人の様にして居やうと云ふことは出来ぬで。其身々々の爲すべき仕

事は。なるべく涼い時にすると云ふ様にして。たゞ仕事をしながらも心さへ静にあれば餘程凌ぎよいものであると云ふことを申すことである。處でこの夏の日やこゝろひとつのおきどころと云ふことをおしひろけて「世の中やこゝろひとつのおきどころ」と云ひたいものである。全體各位は此世の中を如何なる世の中と思ふて居られるか。此世は苦の世界であるが。苦の世の中に居て。苦の世界であると云ふことが分らぬと。猶更苦うて堪らぬものである。臺灣の熱いのも。熱いが當前と覺悟をすれば凌ぎよい。遼東半島の寒いのも寒いは當前と思へば。左程にも寒う感せぬ。苦の世の中も。苦しいのは當前と知れば。おのづから苦も苦とならぬが。苦の世に在りながら。何様ぞして苦を受けともないものである。樂がたいものであると思へば。思ふほど却つて苦しいものである。それで何様ぞ心

の置處おきどころを定めて。苦しいのが世よの有様ありさまぢやと思ふ様ようにしたいものである。處ところで苦くるは世よの中の當相あたりにまへであると云ふことを知らぬ人も隨分多おほいくあるで。此世このよは苦くるしいが當前あたりにまへであると云ふことを御話お話しし申まうして置おかねばならぬ。まづ四苦しよくと云ふて。生老病死しょうらうびやうしと云ふことがありて。誰だれも年としのよりたいものは無いけれども。世よの有様ありさまで皆年みなとしがよりて行く。又病氣またびやうきになりたいものはなければ。これも致方いたしななく病氣びやうきする又死またしと云ふことは。人の第一だいいちに嫌きらふものであるけれども。誰だれ一人ひとりとして死しを免まがるものはない。皆死みなしんで仕舞しまはねばならぬ。そんなら生しょうと云ふ。此世このよに生うまれて出て。生きて居ゐるのは苦くるではあるまいと云ふ方かたもあるかも知れぬが。この生しょうといふに。種々しゆしゆの苦くるをうくべきことをふくんであるのでありて。これが苦くるの元もとになるのである。又また哀別離苦あいべつりく。怨憎會苦えんそうくわいと云ふ四苦しよくを加くわへて八苦はつくとなる。まづ分わかりよ

い處ところより云いへば。哀別離苦あいべつりくとは。別離べつりをかなしむといふことでありて。頼たのにして居ゐりた親おやに死しなれるとか。便たよりにして居ゐりた子こに死しなれるとか。又可愛またかひい妻つよに別わかれるとか。いとしい夫おつとに別わかれるとか。其外そのほか兄弟親屬たいていしんぞくのもの。故舊こきうのものに死別しべつして哀あはむ。又死別またしべつまでなくとも生別離せいべつりといふことがありて。生きて居ゐりながら種々しゆしゆの事情じやうじやうの爲ために別わかれて暮くさねばならぬことになりてかなしむ。又それのみならず。金かね錢衣服其他種々の寶物せんいふくその他たしゆくたのたものなども。これは何時いつまでも。自身自身に持つて居ゐりたいものであると思おもふて居ゐりたものを。手放てはなして人ひとに渡わたさねばならぬ。まことに惜おしいことであるとなけくのも皆哀別離みなあひべつりの苦くるの中なかに入いることである。次に怨憎會苦えんそうくわいと云ふは。これは前の反對はんたいで。イヤなものど一處いしょにならねばならぬと云ふので。これも誠まことに難儀なんぎなことである。彼あの人は誠まことに嫌いやである。彼様あつやうの人は顔かほを見てもゾットすると

云ふ様な。御經には願くは其をして死せしめん等と御説きなされて
 彼様な奴は早く流行病でも死んで仕舞へは好いと思ふ様な嫌な
 人があつて。其人と始終一處に居らねばならぬと云ふので。これも
 随分苦いものである。其他何に限らず。これは好かぬ何様ぞ目にさ
 はらぬ處へやりたいと思ふても。遣ることが出来ず。これは嫌であ
 るから早う捨てたいと思ふても捨てることが出来ぬと云ふこれが苦
 である。次には求不得苦と云ふて。求めて得ずと云ふことで。彼様
 したい。此様ありたいと思ふことも。皆思ふ様にならず。嫌なもの
 と一處に居らねばならず。好きなものと別れねばならぬと云ふ有様
 で。萬事意の如くならず。求むることが得られぬと云ふが。求不得
 苦である。斯様な苦を細に分つ時は千萬無量の苦となることであ
 るが。是等の苦は誰一人として免れるものは無い。此世に生活して

居る以上は。皆是等の苦を受けねばならぬ。中には我々は貧賤であ
 るから。斯様な苦を受けねばならぬが。もすこし富貴な身分になり
 たらば。斯様な苦はあるまいと思ふ人もあるけれども。これは間違
 である。昔からも樂は下にありと云ふて。却つて身分の卑いものゝ
 方が。氣儘が出来て樂なものでありて。身分が高くなれば高くなる
 はど。種々の氣兼ねが多いものでありて。この身分が無ければ。さぞ
 氣樂であらう。地位の爲に。財産の爲に。この様に苦勞をせねばな
 らぬと云ふ様なことになるのである。そこで兎に角に世は苦の世界
 でありて誰一人として此苦を受けぬものは無い。佛は娑婆世界と名
 けられて。娑婆世界とは堪忍土と云ふことで。このもろくの苦の
 中に堪忍して行かねばならぬが此世の中の當相である。故に世の中
 や心ひとつのおきどころでありて。世は苦しいもの。苦しいのが當

前と覺悟をせねばならぬ。苦しいが當前と思ふて見れば。割合は苦にもならず凌ぎよいが。これを間違へて。なんでも樂をした。苦を受けともないと。あせればあせるほど。ますます苦を増す譯である。夏の日が熱いが當前と知れば。さほどあせるにも及ばぬ。又此世の苦しいが當前と知れば。役にも立たぬ氣をもむにも及ばぬ。何れ北に窓のある處は涼しとか。何とか少しの差はありても。熱いは何方も同トこと。苦みは誰も同トことであるから。夏の熱さを知らずに暮らしたいと思ふは無理なこと。世の中を樂に暮らしたいと思ふは無理なことである。どうせ夏は熱いもの。世は苦いものである。されは皆様は。苦しい目ばかり見ねばならぬとあきらめて。樂しいことはひとつもないのかと云ふと。決してさうではない。熱さ寒さにも限りがありて。長い間のことではない。熱も寒さ彼岸まで。昨日

で土ようもすんで。今は早秋の季節になりたことであるが。來月の二十日頃にもなると。早彼岸になりて。熱なり寒なりと云ふ好い時節になる。そこで熱さ寒さも彼岸まで人間の苦しいのも辛いのも彼岸まである。彼岸とは何か。涅槃常樂の彼岸と云ふことでありて人間の苦も暫時の間のこと。一世の勤苦は須臾の間なり後に無量壽佛の國に生れて快樂極無とありて。一世の間の苦勞は極わづかの間のことなので。今に涅槃常樂の彼岸に達して。無量の樂を受けることである。苦樂を離るゝを大樂と云ふとありて。人間の樂と云ふは。苦を離れぬ樂でありて樂と云ふて居るのが。其儘苦勞の本である。涅槃常樂の樂みと云ふは。此様な淺ましい樂ではない。苦樂を離れたる眞の大樂を得ることである。それも遠い先のことではない。暑いのも彼岸まで。苦しいのも彼岸まで。もう直に其場に至る

ことである。此處で一寸残暑の長くないものであるといふことを御話するが。昔から。長くないものを數へて。春寒。秋暑。老健。君寵と云ふことがある。妙な取合せであるが。寒いのも。巳に春寒と。なる。もはや先の知れたもので。もう長くない。秋暑と云ふて。此秋暑も。もはや残暑と云ふて。残りの暑氣と云ふ位であるから。もう暫時のことである。それから老健と云ふて。老人の壯健なものもはや長くないもので。いつまでも御達者なことと云ふて居るけれども。老健となりた以上は。もはや先が短トかい。次には今日に關係の少ないことであるが。君の寵愛と云ふものも。長くはないものぢやさうで。我は君の御氣に入りて居ると思ふて居る中に。足元から鳥が立つと云ふ様なことが起りて来る。それでこの春寒秋暑老健君寵の四を。昔から長くはないものとして數へてある。此中にも

老人の方も大分あるが。老人となりたら。達者でも。もう長くはないのである。若い方も。一世の勤苦は。しばらくの間であるから今に彼の岸に到りて大樂を受くることを樂にして此世は苦の世界である。苦勞を覺悟して。心靜に世渡をせねばならぬ。中には。もう少しの間のことであるから。何様して暮てもよいと思ふ様な方もあるか知れぬが。それは大きな間違で。もう少しの間であるから猶更大切にせねばならぬので。もう残暑で。わづかの間であるからと思ふて。呑みたいからとて。澤山に水を呑み。不消化物を食ひ不養生をすると。彼岸まで待たずして。直に虎列刺病などにかゝりて死んで仕舞ひます。一生は暫時の間であると云ふて不法のことをする様では。なかく。涅槃の證にはいたられぬ。須臾の間と知つたれば。猶更に骨を折りて。うつくしく世渡をし。御恩をよろこびく日を送

らねはならぬことでもあります (下略)

○二諦の教義

前席 (東京令女教會に於て)

今日御話致さんとする事柄は。即ち本宗眞俗二諦の教義に就て聊か御話せんと思ひ升。先つ俗諦門の方は吾々が此の世の中に居る間の心得方であるが。此の心得方は如何致して宜しきかと申すに。總體佛敎の大體より申せば。吾々の最も淺間敷心は煩惱と名けてある。煩惱とは心を惱まし身を惱ますと云ことにて其數は八萬四千あると説てあります。就中重なるものを擧れば貪欲瞋恚愚癡の三つにて之れが。煩惱の最たるものなれば。三毒とも三垢とも名けてある。何れ毒とか垢とか申せば。強ち此の煩惱が未來計りの障に成るにあらず。随分今日の世渡にも毒となり垢となり障となると思はれ升。孔子の教に怒をこらし欲をふさぐと申してあれば。怒ると欲とは惡る

ひものに違ひはなひ。

然るに其の欲と云ふ事に就て詳く云へば。欲は欲すると訓で。斯くあれが左様あれが右と思ふ事なり。併し只左様あれが右斯なればと。思ふ計りが惡るひとは申し難ひけれども。吾々人類の心は淺間敷ものにて遂に其の欲よりして種々様々の邪まな事に落入るから毒と名けたものなれば深く注意せねばならぬ。然るに佛には斯くありたい。左様あれが右と思ふ欲心がないかと申せば。中々左様にあらず。佛には大願と申して大變な欲がある。即ち其の大願とは。一切衆生を殘らず救て佛に成りたいと云ふ大欲なり。故に佛の欲は吾々の欲とは異なり。極めて大なるものです。吾々の欲は目前見事極めて小なるものなれば。大小の差別がある。百畝の治らざる事を憂る。農夫の事なりとある。農夫は只た己の田畑の事のみを心配して

他を顧みる心がなひから。至極些少な欲なり。又商人は只た己の利
 得を思ひ。又小兒は口腹の欲のみを幼少の時は欲が極めて小さく。
 只た甘ひ物を食ひたい計り。敢て衣服の善惡を問ふ事はないが。夫
 れが漸々成長すれば或は衣服が欲しく或は家藏財産が欲しくなりて
 段々欲が増長して大きくなる。而て吾身さへ宜ければ人の難義は痛
 痒相感せず。人の物なら何でも貪はりたく成て来るから貪欲と名け
 た。併し其欲の大なるものは如何と云に。世の中の爲に成様。天下
 の憂に先たちて憂へ。天下の樂に後れて樂まんと云て。或は一國を
 治めんと欲し。世の爲め人の爲め及ぶ限りの事を成し。毫も吾と人
 との隔がなくなるから。其欲たるや實に結構なるものである。
 佛の欲願は其大なる事。實に驚くべきものなり。即ち一切菩薩は。
 衆生無邊誓願度と申して。無邊の衆生を悉く濟度せんと大願を起し

無盡の煩惱を斷ト。又た一切の法門を知了し無上菩提を證悟せんと
 の。四弘誓願を起すものなれば。決して小成に安ずるが如きものに
 あらず。勇猛精進。撓まず屈せず進趣して止まざるなり。況や阿彌
 陀如來の大願は超世無上の誓願。十方衆生餘さず漏さず攝受せんと
 の欲望なれば。其大なる事算數譬喩の及ぶ所ではなひ。退て考ふる
 に吾々の欲は如何なるものぞ。只た之れ吾身の爲め。吾が家の爲め
 若くは吾子孫の爲めと些少の事計にて。一方に徧むく故貪欲となる
 畢竟欲願の狭小なるは貪欲にして。吾々凡夫の有する所。又一切衆
 生と共に安樂國に生れんと願ふは。佛菩薩の大慈大悲の欲と申さね
 はならぬ。
 吾人今日の所業は。果して如何でありますか。滔々たる社會の潮流
 は皆な之れ利己私愛に傾き。所謂我身さへ宜ければ他は關まわぬと

云ふ。有様ではありませぬか。歎けかわらさき次第なり。凡そ世の中の教訓は全體己を措て人の爲にする様に成て居る。即ち先年降たり給ひたる 天皇陛下の勅語に。克く忠に克く孝に云云と仰せられてある。其孝行と申すも親子の間で子は親の爲に身を愛まず。まめやかに仕るから親孝行と云はれる。決して我身を愛むものゝ謂にはあらず。又忠も同様にて忠には即ち命を盡す。一昨年以來即ち廿七八年役に於て。我が陸海軍人諸君が。生命を犠牲に供して。國家君上の爲に斃れられた。噫彼等の死は果して何故ぞ。決して彼等一己の名譽の爲め利益の爲にはあらず。身を殺して仁を爲す。國家の爲め君の爲め義を重んじ身を輕んせしに依らずんばあらず。如此眞の忠孝は人の爲め世の中の爲めを計るの外はない。若忠孝なくんば世の倫理は決して成立せぬ。兄弟夫婦朋友の間も亦同トキ譯である。

近來何れの地にも慈善會が盛にあるが。凡そ慈善と云は讀で字の如く。慈悲善根を施して人を救ふを目的とすれ共。能く其の慈善の依て基く所を定めされば。動もすれば趣意を違へ。慈善會を開き其骨折の名譽丈けは。一身に得んと務むるものもある。如此慈善は初めより爲さざるに若かず。畢竟慈善は己を捨てゝ人の爲にするが故に佛の大悲大願に等しく。佛の道に叶ふものと思はれます。我が眞宗二諦の教旨を聽聞する人々は。願くは些少な我欲や貪欲を起さず。成るべく人の爲め世の爲めになる様。俗諦門に就て常に心掛けぬはならぬ。然るに其の俗諦門眞諦を離れて働くにあらざる眞實信心の眞諦門より流出たる俗諦門なり。

昔は齊の宣王孟子に問て曰く。寡人疾あり寡人貧を好むと申されしに。孟子は直に其言を取て夫れは結構で御座ります。昔の聖人も矢

張貨を好んたから。決して差支はありませぬ。併し古聖人と御身とは其好様に違目がある。御身が貨を好むは只一己の利益の爲めなれども。古人は世の爲め人の爲め幸福を増進せしめんことを計れり。故に御身も利己些少の欲を離れて。宜しく社會の爲に貨を好む玉はんと申した。然るに齊の宣王又た語を次ぎて。寡人勇を好むと云はれたれば。孟子直に其語を捕へ夫れも至極結構。昔者文王勇を好む文王一度怒て天下の民を安んず。今ま夫れ御身が好む玉ふ勇とは果して云何。文王の如き大勇か。否を只た一人に敵する匹夫の勇ならん。王願くば之を大にせよと申した。阿彌陀如來は一切衆生を皆佛に成さんと大願を起し玉ひ。既に一度志を起た已上は。此願満足せずんば誓て正覺を取らず。と仰せられた所が。恰も文王一度怒て天下治ると同トく。一切衆生の艱苦を救はんとて大願を起し大行を

勵み玉ひたれば。毫も佛御自身の爲にあらす。全く法界々の衆生の爲に。御苦勞被下た譯てあり升。去れば吾々の貪欲即ち此の狭少な胸中に包藏する欲は。佛に對して耻入るばかり。誠に淺間敷きツマラヌものであり升から。願くば皆さん方生得の貪欲。嗔恚。愚痴三毒五欲の迷心をあやまりはてし。我身はわろきいたづらものなりとおもひつめて。其上に廣大の御恩を喜びつゝ。心廣く臚脾かに普く世の中の爲め人の爲めと御心掛ありて。眞諦門の相續の上より。麗はしく俗諦門を御履行なされんてを。希望致します。

○二諦の教義 (後席)

前席には俗諦門の御咄を致しました。今度は眞諦門の方。即ち未來佛に成ることに就て少しく御話致す。扱て前席にも申せし如く吾々は一生涯僅か五十年を目安に立てし。希望を起すから。其希望た

るや極めて些少なるもの故。何か少しく蹉躓する事あれば忽ち絶望の念を起すは吾人の慣であります。如此時に當て佛法を聽聞して居れば。自ら精神をして興奮せしむることを得。何となれば佛法を聽聞するものは眼界自ら廣ければ。音に此世計にあらず來世も來々世もあると思ひて。心豊かに氣永に事業を爲し敢て狼狽することなく却てドコ迄も遺遂ける。奮發心を起すに至るものです。然るに突然如此話をすれば。皆さん方は定めて奇異の思を爲されまじようが。拙僧は過日仙臺に出張致しました時。宮城集治監に參り囚徒等の實況及び教誨の状態を視察致しました。宮城集治監は構造も極めて立派ですが中に容收て居るものも實に貴重なるもの否な貴の字を付るは少く不穩當なれども。兎に角重罪なるもの計り。即ち無期徒刑とか又は有期徒刑何十年とか申すものが數多御座りますか

ら。殆ど皆絶望の念を以て充たされてある故。入監早々逃亡を企てたり。或は荒々敷所行を爲して。獄吏を困らせる事も折々ある。之れが即ち彼等の絶望の深淵に沈んたる結果である。然るに此等のものに對して。本願寺より出張の教誨師が懇々説諭教誨を施す時は逃亡を企るなどの事はなくなるが。その代り。此世の苦難を厭ひ寧ろ死んでしまひたい。早く殺して被下と典獄に訴へ。或は度々自殺を企つるに至る。是が殆んど絶望の極である。それ故。典獄は毎々教誨師に依頼して。懇篤。誠實に訓戒せしめ。而して以て彼等の煩悶苦痛を慰めしめます。此の場合に於て最も効力ある話は。佛教の因果應報の道理。未來得脱の妙法より外はない。去れば極惡暴戾絶望の淵に沈淪する彼等も。三世因果の理法。違はざる事や。阿彌陀如來の無邊の光明無蓋の大悲を以て。未來の苦難を救済し。長く安養

の淨土に於て樂ましめ玉ふ理を聞くに隨て。漸々獄則も遵奉し品行方正となりて。念佛三昧命終を待て。頓て極樂に往生せんと思ひ。また自殺の念をも斷つ様に成て參ります。此の令女教會に於て斯る話をするには。不倫なる様なれども。世の中には満足と云ふ事甚た少なひものにて。隨分此の列席の中でも。之はあれども彼が思様に參らぬと。不足に思ふ方もありまじよ。併し不足がありて思事叶ぬが。人間社會の常習ではありませぬか船に乘たら揺り様の多ひ所と少なひ所との差別はあれど。毫も動かぬ所はありますまい。アナタ方は高貴の御身分にして。思ふ事の叶はぬ事は少でありまじよけれど。併し船全躰から申して見れば動かぬ所のなひと等しく。矢張何彼に就て不足が起り。噫人間僅か五十年。倩々思は早や既に人生の半を過ぎ。今更ら嫁入するの暇もなひと嘆

ひて見たり。此の事彼の事。種々様々低徊願望。遂に此の世に望みなく。殆んど絶望の淵に沈む事はありませぬか。

若し人生五十年限にして。絶へて未來の觀念なくんば心細ひ事ではありますまいか。爰に未來が大事と氣が付き。迷を轉つて證を開かして貰ふことに思ひ至らば。憂鬱は轉つて喜びとなり。不足は轉つて大満足心となる。之れが即ち佛法の大願を發起し大行を勵まんとする。大菩提心と申すものである。扱て此の菩提心を自力で修せんとすれば。布施。持戒。忍辱。精心。禪定。智惠の六度萬行を修行せねばならぬ。中々吾等如き凡夫の身が。容易に成し得る處でなひ爰に阿彌陀如來は。吾等の爲に大願を起し大行を勵み。五劫永劫修行して。諸佛の力に叶はぬ惡人女人を助けずんば。正覺を取らんと誓ひ玉ひ。遂に此願行を成就して。阿彌陀如來とならせ玉へり。故

に其光明は横に十方を照して至らぬ限なき故。無量光と名け。又其の壽命は五十年百年にして盡さるにあらす。豎に三世を貫き未來永劫變らぬ壽命なれば。無量壽如來と申し奉ります。今ま吾々や皆さん方は。如何でありますか。横には僅か一家眷屬のみ。豎には僅か五十年。實に狭ひ少さい欲望ではありませぬか。然るに阿彌陀如來は。横に十方衆生豎に三世の衆生と。其樂を共にせんと。大願大行を起し玉ひ其願行成就して。幾久しく吾々を濟度して被不から。吾々は願を起し行を勵む力はなくとも。佛の物を吾物と頂き。御助けに預るから。丸で他力の回向であります。彼の齊の宣王。孟子に問て云には。文王の囿は方七十里とさく。然るに寡人の囿は方四十里なるに。民猶以て大なりとするは何ぞやと孟子答へて曰く。王の囿は自分一己の歡樂の爲に設けられたれば。

民以て大なりとす。文王の囿は方七十里なれども。芻蕘の者も往き雉兔の者も往く。民と共に樂む。故に民以て小なりとすと申した。爰を法門に對照すれば。實に難有味ひ所であります。齊の宣王の園囿は。自分一己の爲に作たものなれば。容易に出入は叶はぬと同く。阿闍寶性の淨土は妙なれども吾等如きの惡凡夫。如何にして參られましょか。然るに難有仕合には。民と共に樂む文王の囿の如く阿彌陀如來の淨土は。吾々共の爲に御作り被下た寶國なれば。決して參るに氣兼ねはなひ。又彌陀の淨土は廣大にして邊際なし。僅か七十里の比にあらず。此の廣ひ結構な淨土は。即ち吾々一切衆生を攝取して漏さぬ爲に。御作りなされた。佛の願が即ち吾々の願。佛の行が即ち衆生の行となりて被下るので。決して唯佛一人居淨土に非ず。一切衆生と共に樂んで下さるのが。彌陀の淨土であります。

から。深く喜ばねはならぬ。

扱て爰の味ひが能く會得り。佛願の生起本末を聞て疑心なく。恰も
文王と國民の如く。彌陀の正覺即ち吾等が爲めと心得られたら。南
無阿彌陀佛と聞かば。あゝ早や吾が往生は成就しにけり。極樂と聞
かばあゝ早や吾が往生すべき所は成就しにけりと思ふべしと。古徳
も示されまじたが。之れが歸命の一念であり升。去れば此の信の上
からは。決して僅か五十年の狭ひ心に住せず。未來永遠の思を爲し
て。今生後生麗はしく過さねはならぬから。經には一世の勤苦は須
臾の間なり。後に無量壽佛國に生じて。快樂無極と御説なされた。
實に難有事であり升。若し此の理が了解らんければ。縱令身分は
善く。家計豊な人でも。決して満足に住する事はならぬ。世間には
身は貧乏ながら心は豊かにして。錦衣玉食に勝るものもあります。

此の令女教會々員諸姉には不如意の嘆はありますまひ。併しあるか
無かは皆さんの胸に御尋なさい。若し不如意不満足の心が起りま
したら。船に乗たら動かぬ所はなひ。嗚呼不如意も今暫らく。未來
は無量壽佛國に生るゝ事と思ひ。願くは在世の間は。麗はしく御相
續あらん事を。偏に希望致します。

(完)

演説集之部終

明治廿九年十月二十四日印刷
同 年十月二十九日發行



訂正増補兼 編纂者 法園社
京都市花屋町新町西入

業務擔當者 眞能義淵

兵庫縣平民

發行者 清水精一郎
京都市油小路御前通上
佛具屋町四番戸

京都府土族

印刷者 井出時秀
京都市木津屋橋通堀川東
入三十四番戸(活版業)

發行所 興教書院
京都市油小路御前通上ル

眞宗法の園

毎月一回發行

定 郵税共 四錢五厘

價 一年分 五十四錢

法之園は眞宗専門の雜誌にして。誰にても讀み得る總ふりかとなつきの雜誌なり。其記載せる所は。御親教および本山集會所。總會所の説教。其外有名の方々の説教。法話。演説の筆記を。口にて云ふ如くに。讀み易く。解し易き様に書綴りて掲載す。なほ蒐録。講録。寄書。雜報の欄ありて。種々の有益なることを掲載す。而して毎月一冊づゝ順次に新なるを發行す。明治三十年九月には。すでに其第百〇一號を發行したり。定價は一冊四錢。郵便税五厘。一年分前金五十四錢(すべて前金拂込にあらざれば發送せず。されども見本御所望の方は。端書にて御申込あれば舊刊の雜誌一冊限無代價にて進呈す)なり。僧侶方在家衆共に師友として。常に珍重すべき雜誌なり。

發行所 京都市花屋町新町通西入 法園社
大賣捌所 京都市油小路御前通上ル 興教書院

前田慧雲師題辭●安田得忍師辨述

(木版和本四冊)

說 三信字訓談

實價 金四十五錢

郵稅 金六錢

右說教三信字訓談は、銘文に出でたる三信の御釋と照し合せ。尙其の御文を讀誦とし信卷の三十三通りの御字訓を一々誰れにも能く了解し易き様。譬喩因縁を交へ他力安心の

一途を詳細に説教せられしものあり。特に眞宗三大家の説教を參考として編述したるものなれば。其説の確實なる其辨述の流暢なる未だ其比を見ず。而して每席第一序辨、第二釋義、第二引例、第四餘辨と四段に分ち以て一席の長短を自由にす。又右四段は何れの法席にも活用することを得べし實に説教の模範とすへきの良書なり。

赤松連城師口演

演 說 說 教 集

全一冊 實價 金四十五錢

郵稅 金八錢

右は法の園第一號より第百號迄に掲載せし同師の演說。説教を編輯して別冊にせしものなり。其良書なることは弊院の言を待たず。

大洲鐵然師題辭
東陽閣圓月師著述

全八冊 外ニ科段一冊

本 典 仰 信 錄

和紙和本上製

定價 金貳圓四十錢

郵稅 金拾八錢

東陽師曩ニ十數種ノ著書ヲ公ニシ宗學研究者ニ裨益ヲ與ヘラル。殊ニ今回世ニ公ニスル本典仰信錄ハ師ガ一代ノ大著述ニシテ。月珠門下ニアリテ琢磨研鑽セラレ。爾來講究ニ講究ヲ重テ精思ニ精思ヲ積ミ。茲ニ甫メテ完備大成セシモノナリ。師ハ嘗テ月珠老師ノ對問記ヲ校讎シテ世ニ公ニスルモ。尙ホ馨サヅル所アリトシ自ラ奮起シ。八旬余ノ高齡ヲ以テ六百餘紙ノ大著作ヲ世ニ公ニシ。專ラ力ヲ宗學ノ振揮ニ盡サル。苟モ斯道ニ志アルモノ必ス座右欽クヘカラサルノ良書ナリ。

大洲鐵然師題辭●楠瑞緣師編述

經 論 譬 喻 勸 誠 編

定價金二十五錢
郵税金四錢

○第一章 勸信ニ就テノ譬喻二十喻 ○第二章 誠疑ニ就テノ譬喻十喻

○第三章 誠惡ニ就テノ譬喻十喻 ○第四章 勸善ニ就テノ譬喻十喻

○第五章 無常ニ就テノ譬喻十二喻

右經論ノ譬喻六十餘ヲ基トナシ。同師之ヲ講演釋話セラレシ譬喻因縁。故事寓意談等モモ亦數百喻アリ。軍隊布教及ヒ監獄教誨等演說說教ノ好材良ナリ。中卷。下卷モ上卷ト同シク全編ヲ五章ニ分チ。近日出版ス。

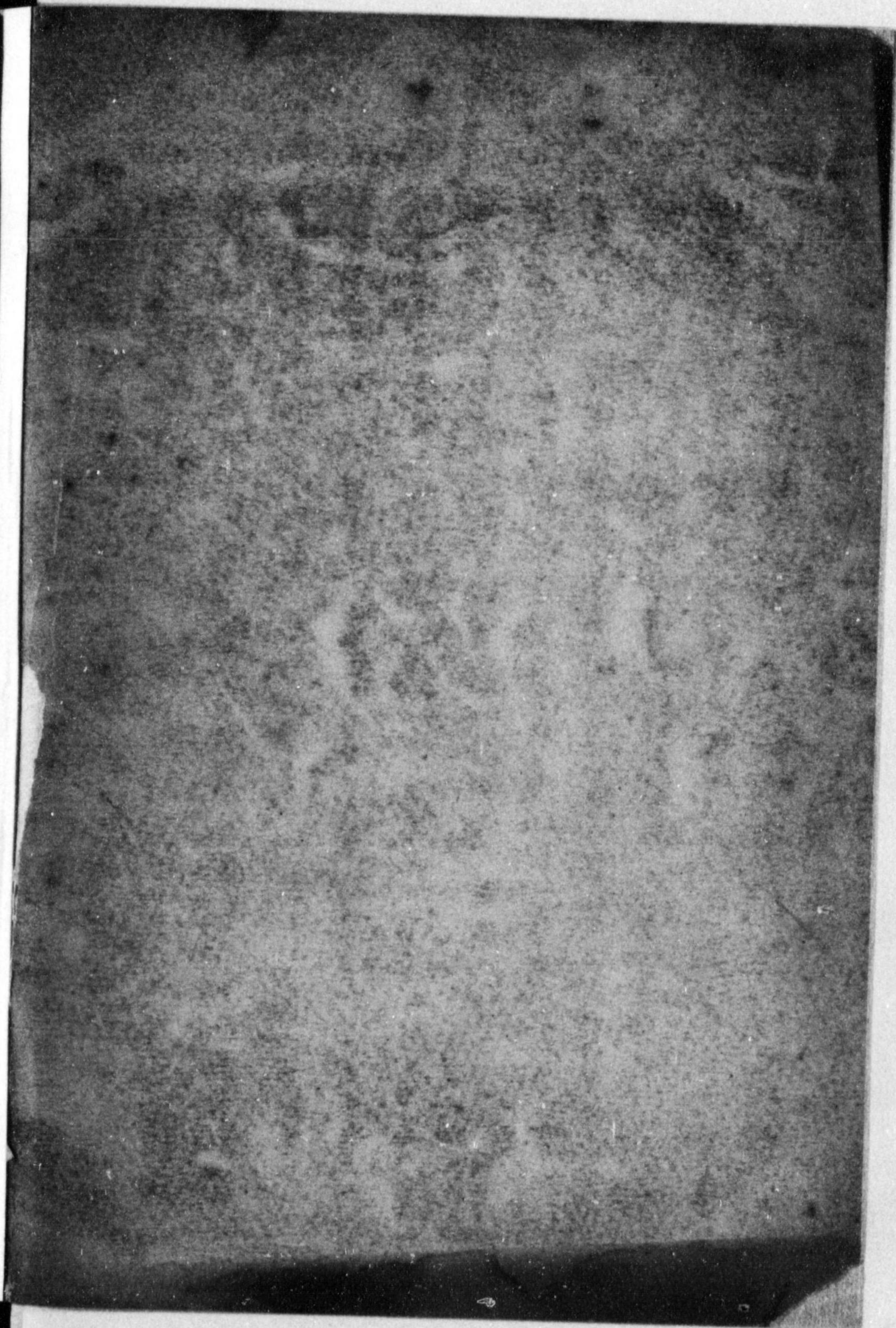
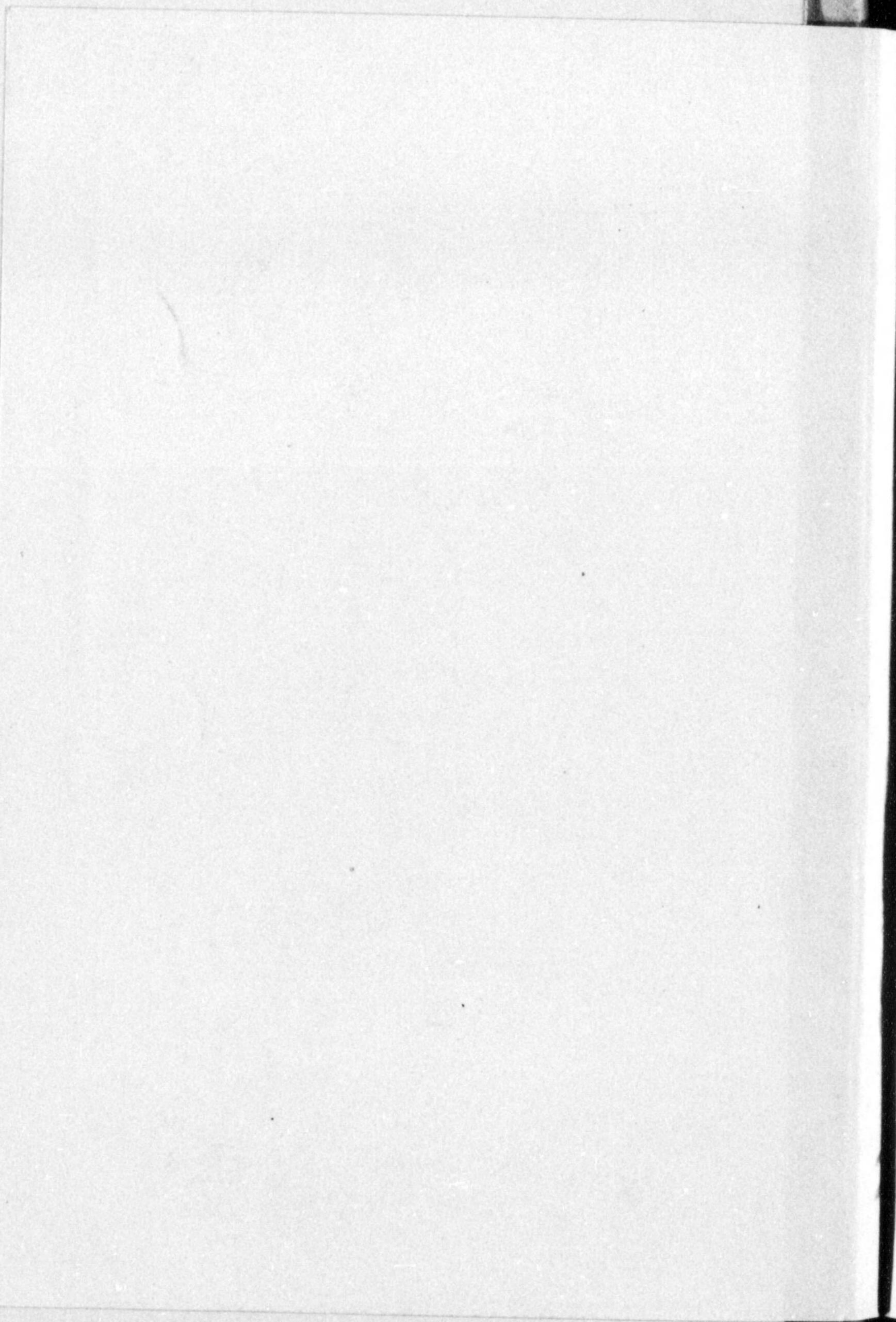
●報恩講式文說教

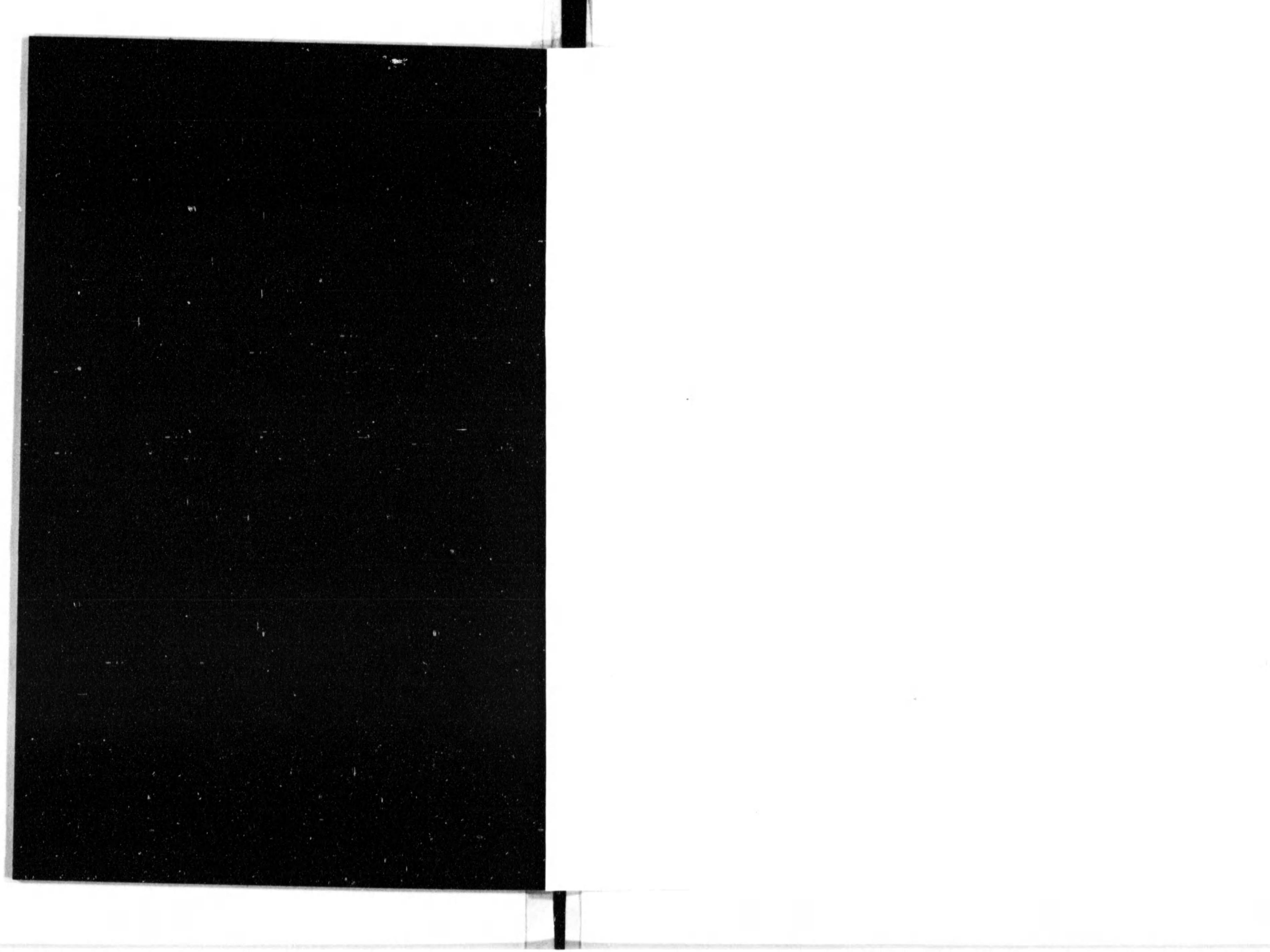
實價金二十錢
郵税金四錢

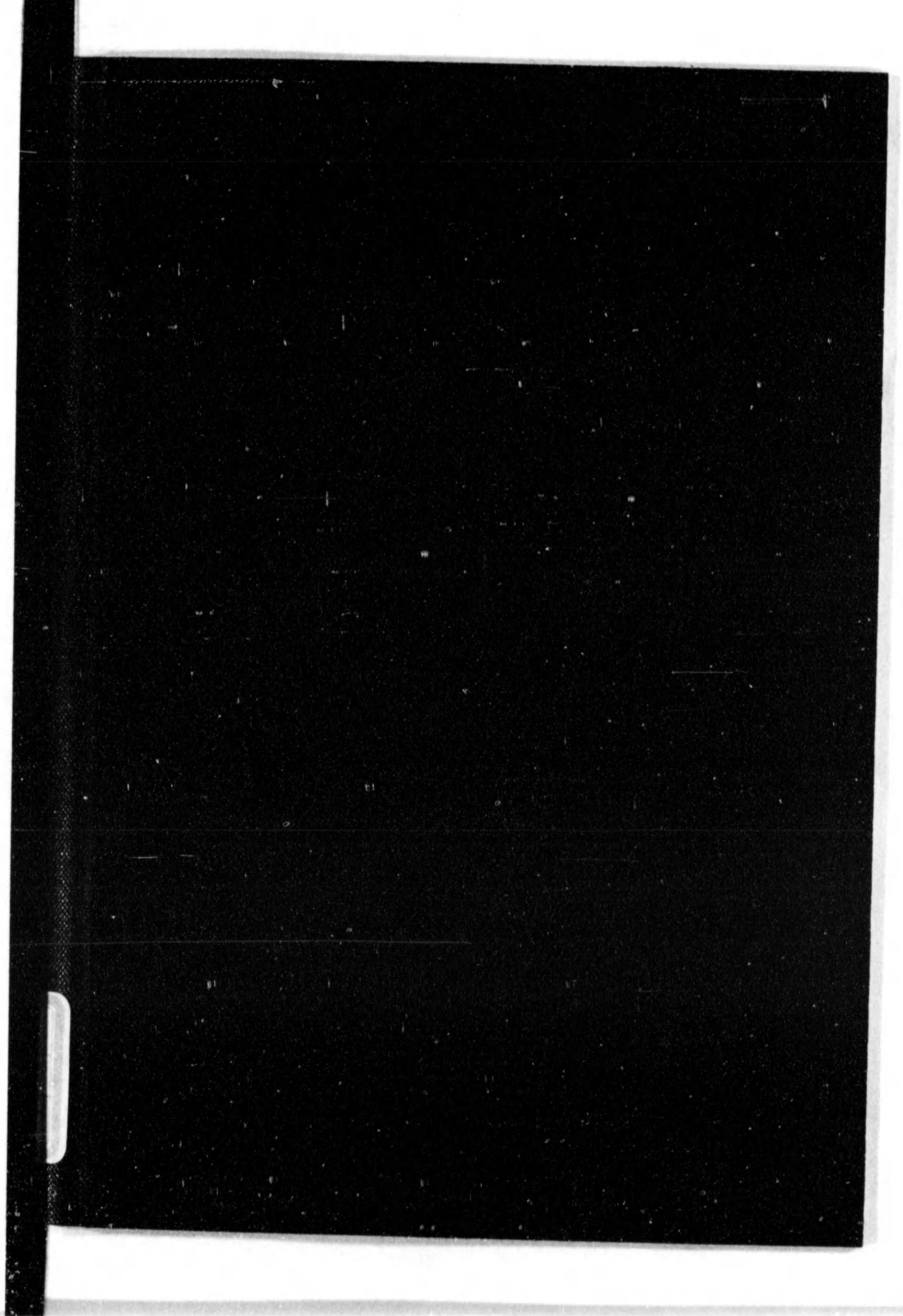
發行所

京都市油小路
御前通上ル

興教書院







特18

391

演説説教集

国立国会図書館

017426-001-8

特18-391

演説説教集

赤松 連城/述

M29, 30

ABF-0155



